

海の道むなかた館長

第5回 一支国

西谷 正

I はじめに

倭人伝に見える一支国

II 一支国の形成

(1) 稲作の始まり

(2) 一支国の成立—弥生時代中期後半

首長墓から王墓へ



III 一支国の遺跡

(1) 国邑＝王都（国都・首都）＝拠点集落—原の辻遺跡

(2) 衛星集落—カラカミ・車出遺跡

(3) 航海祭祀—天ガ原遺跡

(4) 高地性集落

IV 一支国の生活

(1) 生業と食生活—農業・漁労・狩猟・植物採集

(2) 争い—武器・武具

(3) 信仰—ト占

V 一支国以後

前方後円墳の出現と壱伎直

VI おわりに

一支国と伊都国

又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官
 亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹
 木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足
 食亦南北市糴

(三國志『魏志倭人伝』より)

(狗邪韓国)



(対馬国)



(一支国)



千余里

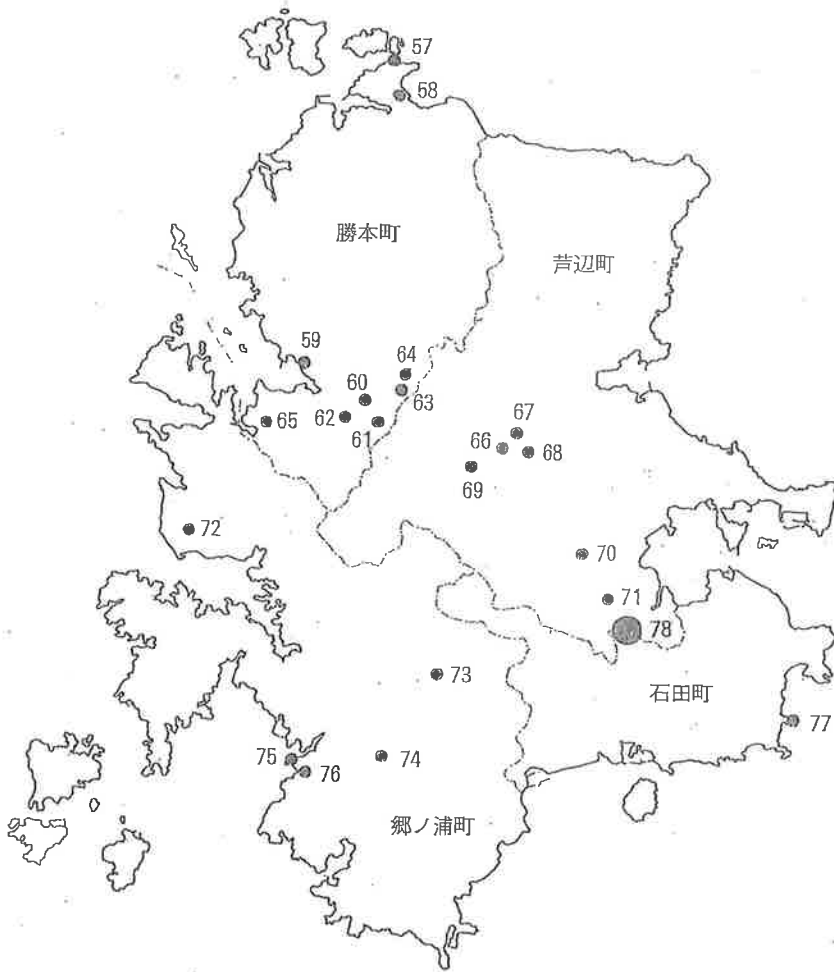
福岡

唐津

(末盧国)

0 25km

- 五七 串山ミルメ浦遺跡
- 五八 天ヶ原遺跡
- 五九 松崎遺跡
- 六〇 カラカミ遺跡
- 六一 双六古墳
- 六二 対馬塚古墳
- 六三 笹塚古墳
- 六四 掛木古墳
- 六五 石路（イシロ）遺跡
- 六六 鬼の窟古墳
- 六七 兵瀬古墳
- 六八 寺崎嶋分寺（国分寺）跡
- 六九 カシヤバ古墳
- 七〇 観上山古墳群
- 七一 大塚山古墳
- 七二 鬼屋窪古墳
- 七三 大原天神の森古墳群
- 七四 松尾古墳（永田一号墳）
- 七五 鎌崎遺跡
- 七六 名切遺跡
- 七七 大久保遺跡
- 七八 原の辻遺跡



長崎主要遺跡

申叔舟 海東諸国紀（一四七一年完成）

一 岐島

郷七。水田六百二十町六段。人居は陸里十三、海浦十四なり。東西は半日程、南北は一日程なり。志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留分治す。市は三所有り。水田と旱田は相半す。土宜は五穀。収税は対馬の如し。

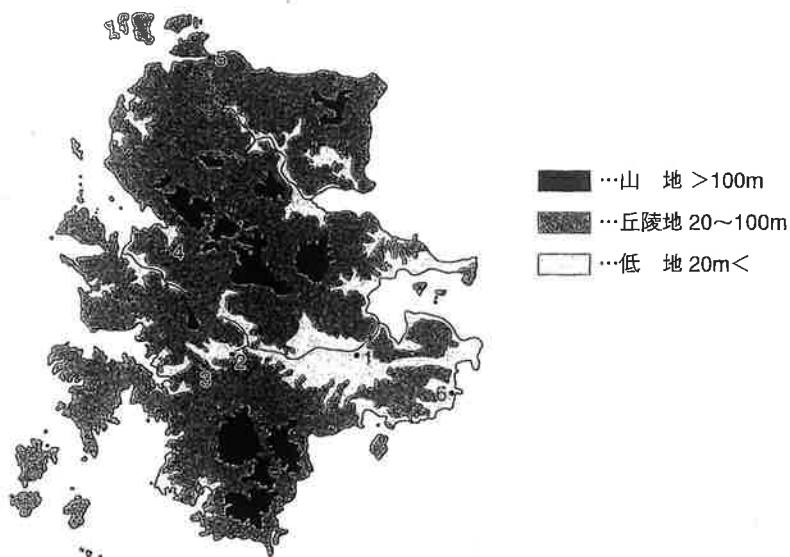
一一 岐島——長崎県寺崎郡。

二 志佐——一四五五年七月、倭護軍藤九郎は姜孟卿の「志佐何等人」の質問に「二岐太守也、居肥州上松浦、使真弓為代官、守此地」と答えている（『世祖実録』元年七月丁酉条）。

三 土宜——土産のもの。

四 五穀——米・麦・粟・豆・黍・稗など主要な穀物。

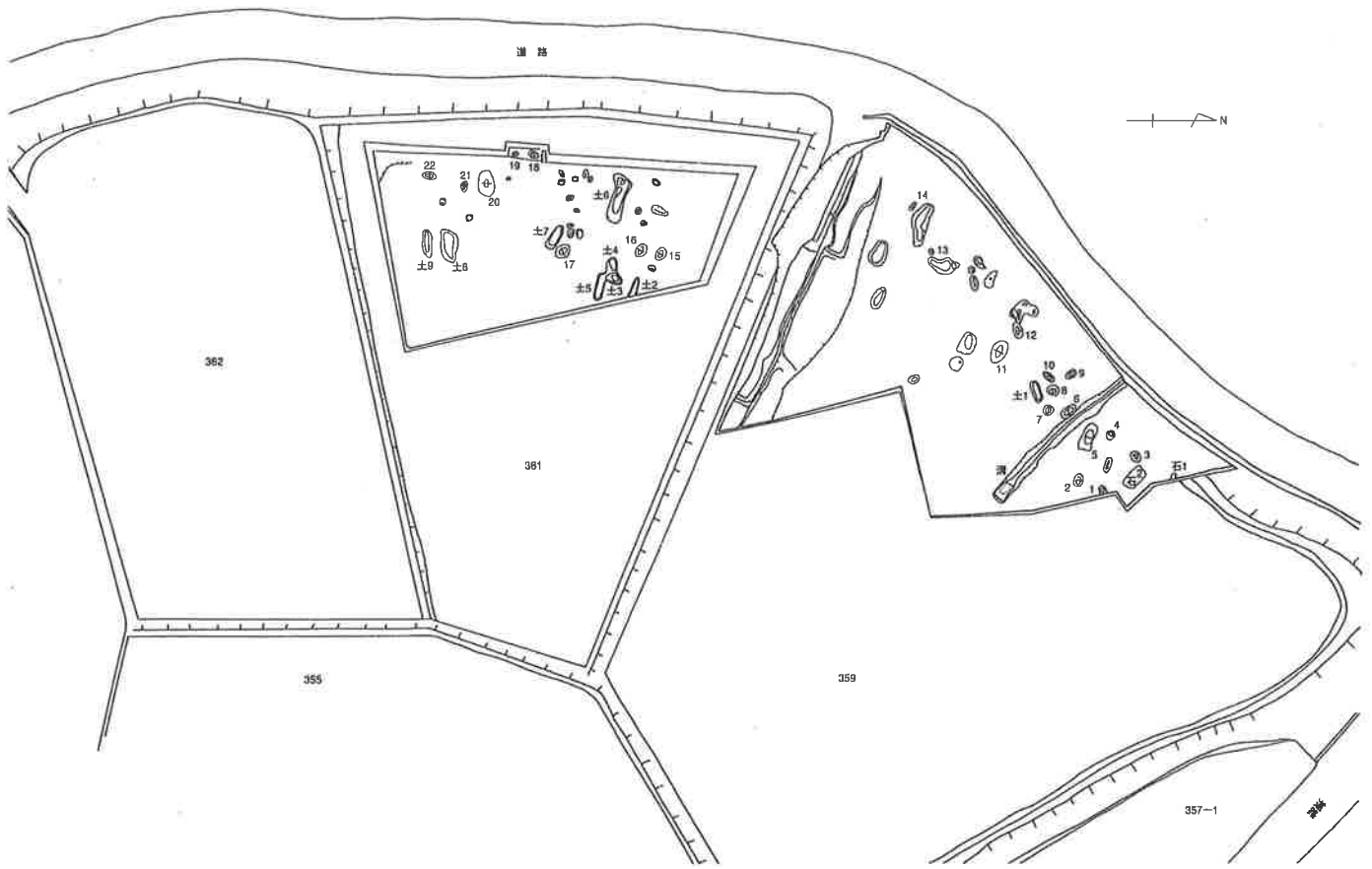
又、南一海を渡ること千余里。名づけて瀬海という。一大国に至る。官をまた卑狗といひ、副を卑奴母離という。方三百里ばかり。竹木叢林多く、三千ばかりの家あり。やや田地ありて、田を耕せども、なお食するに足らず。また南北に市糴す。



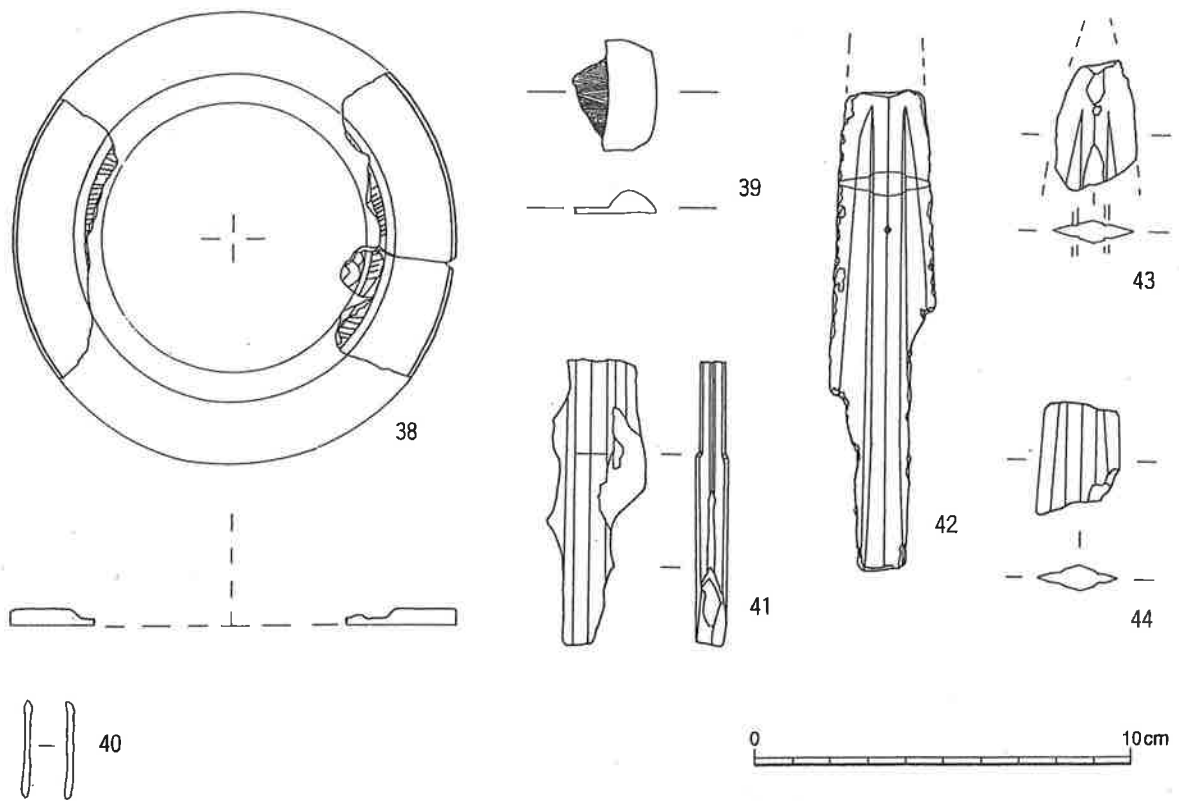
弥生時代遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	原の辻遺跡	弥生土器・石器・青銅器・鉄器 一支国の中心集落 韓半島系・大陸系の遺物が大量に出土	長崎県教育委員会・芦辺町教育委員会・石田町教育委員会
2	車出遺跡	弥生土器・銅鏡片・ガラス玉 丹塗磨研土器が多く出土	長崎県・郷ノ浦町教育委員会 (1998)
3	戸田遺跡	弥生土器・韓半島系土器 車出遺跡と同一集落の可能性	郷ノ浦町教育委員会 (2003)
4	カラカミ遺跡	弥生土器・骨格器・ト骨 海人的性格をもつ環濠も備える	勝本町教育委員会 (1985.1988)
5	天ヶ原セジョウ神遺跡	銅矛 中広銅矛が3本出土	勝本町教育委員会 (1985)
6	大久保遺跡	弥生土器・須恵器 石棺墓 壮年男性の人骨が出土	長崎県教育委員会 (1988)

弥生時代遺跡一覧表



石田大庫地区遺域図

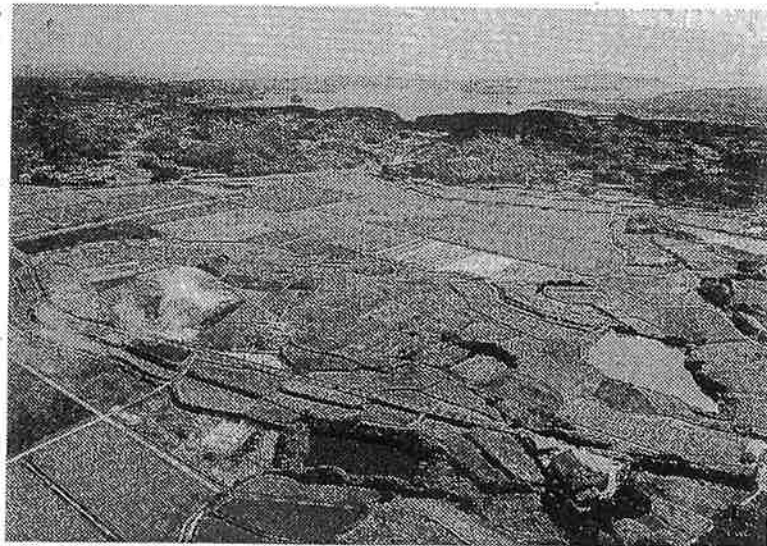


金属器（その他）実測図（1/2）

石田町教育委員会，2003『原9辻遺跡』『石田町文化財調査報告書』第5集

長崎県吉岐の原の辻遺跡は、「魏志倭人伝」に登場する一支国の国都とか王都の遺跡といわれる。そうすると、『後漢書』倭伝や「漢委奴国王」金印から考えて、福岡平野に奴国があり、奴国王がいたように、一支国にも一支国王の存在が類推できる。奴国に関して、福岡県春日市の須久岡本遺跡D地点で、弥生時代中期後半の甕棺墓から、多数の前漢鏡のほか、銅剣、銅矛、銅戈、ガラス璧、勾玉、管玉など、豪華な遺物が出土したことから、奴国王の王墓に比定されている。一支国の王墓はどこ

原の辻遺跡の墓域確認



原の辻遺跡＝7月24日、本社ヘリから野田武撮影

首長墓から王墓へ 共同体から国へ

初ごろの王墓があった可能性が高いと考えてきた。ところがこのほど、そこが類が見つかっていたことが明らかにされたのである。注目したいのは、石田大原

地区の墓域には、これまでの推定王墓より200年ほどさかのぼって、弥生前期末から中期ごろの首長墓が含まれていた可能性が高くなったという点である。

そこで、福岡平野西縁部の吉武高木遺跡3号木棺墓の例を見よう。ここからは、多鈕細文鏡と細形の銅剣、銅矛、銅戈、硬玉勾玉、碧玉管玉、小壺などが出土した。これら多種多量の出土遺物の隔絶性からいって、「早良王墓」ともいわれるほどである。

この出土遺物に照らして、石田大原地区の墓域を見ると、遺憾ながらいずれも攪乱層からの出土とはいえず、このたびの多鈕細文鏡と細形銅剣のほか、かつて戦国式銅剣や細形銅矛も出土している。弥生前期末ないし中期初ごろ、それらの遺物を副

「一支国」の形成へ迫る



西谷 正

原の辻では弥生中期ごろから漢の種々の文物が出土し始める。これは吉岐の共同体が朝鮮半島の楽浪郡を通じて漢帝国と外交関係を結んだことを意味し、それ以後、漢帝

国から一支国ならびに一支国王として認識されたといえる。したがって王墓と呼ぶことができるのは弥生中期ごろ以降の首長墓からである。石田大原地区では、前漢末から新のころの銅鏡も出土している。弥生前期末ごろの王墓の副葬品であった可能性も指摘されている。

このように見ると、石田大原地区の墓域は、吉岐における首長墓から王墓へ、さらには共同体から国への形成過程を物語るものだということができるのではないかと。その後、一支国の王墓は大川地区へ移ったと考える。吉岐では、奴国の王墓といわれる須久岡本遺跡D地点のような、中期後半の王墓は未発見である。ただ、原の辻遺跡の発掘調査は、80秒ともいわれる遺跡全体のわずか数秒しか終わっていない。今後の調査で、王墓域の変遷はもとより、一支国の構造が徐々に解き明かされてゆくであろう。

北部九州では、吉野ヶ里遺跡をはじめとして、各地におけるこれまでの調査成果を相互補完的に考えて、国々の形成過程がかなり明確になってきた。しかし、平野部の拠点集落と高地性集落の関係や、衛星状に展開するほかの遺跡群との関係などをトータルに考える必要がある。その意味でも、吉岐島という地理的に限られた地域で、しかも一支国とその王都が特定できているような国の典型例の形成過程に迫ることができるという点で、原の辻遺跡を拠点とする吉岐の遺跡群はきわめて重要なのである。(にじに・ただし＝九大名誉教授・考古学)

平成7年度大川地区遺構一覧

地区	種別号数	時 期	遺物・副葬品	備 考
A1	1号壺棺墓	後期中頃		壺+壺
A1	1号土塋	中期末	鉄鋤先、鉄鏝、丹塗土器片	
A2	土塋			
A2	土塋			
A2	1号石棺墓	後期?	骨少々、弥生土器片	石棺抜け跡
B1	2号壺棺墓	後期前半		壺+壺?
B1	ビット	前期末	弥生前期土器片	
B1	2号石棺墓	後期	弥生土器片	
B2	2号土塋	中期末	丹塗土器片	
B2	1号土塋墓	中期末	ガラス小玉385以上、ヤリガンナ、丹塗土器片	木棺墓?
B2	1号溝	中期末	丹塗土器片	
B3	2号溝			
B4	1号石塋土塋墓	後期?	弥生土器片	
E2	4号壺棺墓	後期前半	ガラス小玉54	壺+壺
B4	3号土塋			
B5	3号石棺墓	中期末	管玉7、丹塗土器片	石棺抜け跡
B5	6号壺棺墓	後期後半	ガラス小玉6、棺内に朱	壺
B5	4号溝			
B5	4号土塋	後期中頃	弥生土器片	
E1	土塋	後期?	弥生土器片	
E2	5号壺棺墓	後期前半	ガラス小玉20、管玉、丹塗土器片	壺+丹塗壺
B2	3号壺棺墓	後期前半	ガラス小玉19	壺+壺
G1	4号石棺墓			
G1	3号土塋墓	後期後葉	ガラス小玉4、鉄劍、弥生土器片	
G1	5号土塋	後期後葉~	弥生土器片	
G1	5号石棺墓	後期?	弥生土器片	石棺抜け跡
G1	6号土塋	後期?	弥生土器片	
G1	7号土塋	後期後葉~	弥生土器片	
G2	2号土塋墓	後期?	鉄鋤先	ビット
G2	7号壺棺墓	後期後半		壺+壺
E2	3号溝	中期末	丹塗土器片	
B1	5号溝			

大川地区墓域図

	前 期		中 期				後 期					古 墳		内 容 ・ 構 成 等
	後 葉	初 頭	前 葉	中 葉	後 期	末	初 頭	前 葉	中 葉	後 期	末	初 頭	前 葉	
石田大原	—													壺棺墓・小児壺棺墓・石棺墓・石塋土塋墓・溝
大 川														小児壺棺墓・石棺墓・土塋墓(木棺墓)石塋土塋墓
原の久保A			...											小児壺棺墓・石棺墓・土塋墓石塋土塋墓
原の久保B														壺 棺 墓
原の久保C						...								小児壺棺墓・石棺墓
柏 田			..			...								小児壺棺墓
原8.13区														
鶴 田														壺棺墓・小児壺棺墓・石棺墓
関 繰														小児壺棺墓・石棺墓・石塋土塋墓

原の辻遺跡の墓域変遷表



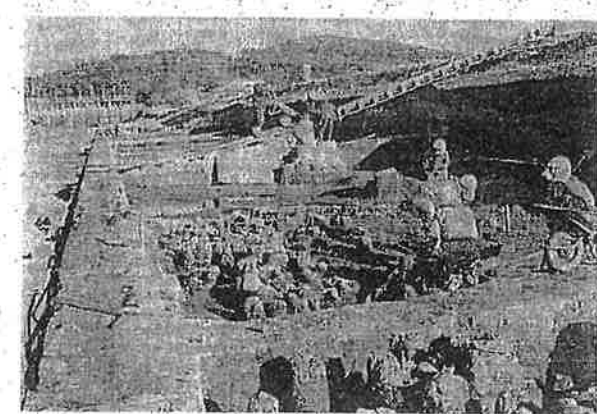
原の辻遺跡の概要

中尾篤志, 2004「「友国」における生産基盤」『考古論集』

一支国の王都だった

長崎県壱岐 弥生時代の生活情報を提供

三十五日間の調査を終えたとき、原の辻遺跡の広大さと遺物の豊富さを改めて実感した私は、将来、長崎県立壱岐高等学校の教師になり、一生涯をかけて発掘したいものだと思った。残念ながら、この夢は果たせなかった。



一支国の王都と確認された長崎県壱岐の原の辻遺跡

さて、いままの辻遺跡は、全容解明に向けて調査が進められている。分布範囲が八〇センチにわたり、そして、数百年前の旧石器時代から数百年前の中世まで、長期間に営まれた巨大な複合遺跡であることがわかってきたのである。そのうち、最も注目されるのが、弥生時代中・後期とみられる紀元前

スの副葬品もしくは装身具に匹敵する。

他の集落群の頂点に

(一)で、壱岐が「魏志倭人伝」に記された一大国、言いかえれば一支国(いぎ)の故地と想定される。原の辻遺跡は、他の中・小の集落群の頂点に立つ、まさに一支国の拠点的な中心集落といえる。倭人の伝によると、倭の国々はそれぞれ国邑を定めていたと見え、(二)でいう国邑とは国都あるいは首都を指すものである。その必要手がかりを与えてくれるのである。

これまでに行われた原の辻遺跡の発掘調査は、全体

のわずかに二・五割に当たる二割にすぎない。多重環濠や水田の遺構、生産工房など王都を構成する諸機能、さらには、一部で検出された幅三・四メートルの道路の東方延長線上における溝の遺構など、未解決な問題が山積みしている。この調査の進展を見守りたいと思う。

魏志倭人伝の記述裏付け

大規模な集落形成
いまから三十四年前の昭和三十六年の夏、大学四年生の私は、長崎県壱岐の原の辻遺跡において、発掘に精を出していた。壱岐考古学会の調査に参加したときのことである。その当時、畑では、いたるところに弥生土器が散らばっていて、そこが遺跡の宝庫であることがますます見つけつづけていた。

首長墓級の副葬品
壱岐では、弥生時代の遺跡が六十カ所ほど知られている。その中でも原の辻遺跡は、環濠の最大規模が南北約七五〇メートル、東西約三五〇メートル規模においては突出した存在である。もちろん

出土遺物の質と量について、内・中・外の三重環濠をめぐらし、二四軒という遺跡のほぼ中心部に当たる最も高いところ、北側が板塀ともいわれる囲いで囲まれ、南側を一条の溝とその内側に柵列を伴った通路の遺構で区画されてお

り、その内部から高床式の大型建物が見つかっている。これらの建物は、一般住民の住居が半地下式の堅穴であるのと対照的に、地上に堂々とした景観を示

た。ところで、原の辻遺跡で発見された大量の遺物は、実にいろいろなことを教えてくれる。弥生時代の生活情報をもっと提供してくれたい。たとえば、やや田があり、水田を耕したと「魏志倭人伝」に記されているが、自然科学的分析結果から、外濠の内・外における水田遺構の可能性が指摘される。倭人伝はまた、南や北との交易を伝えるが、そのことを裏づけるかのよう

に、中国の貨幣や韓国の土器のほか、日本の九州や中国地方の土器などが出土している。さらに、倭人伝に記載される武器・武具類や倭国の乱とも係る鉄鍬・骨鏃や木製短甲のほか、倭人の伝には見えない銅鍬の多量出土など興味がつきない。このように見ると、原の辻遺跡は、「魏志倭人伝」の記述を考古学的に検証できるとともに、国形成期と見えてくる。国形成期とは国都あるいは首都を指すものである。その必要手がかりを与えてくれるのである。

原の辻遺跡

発掘の意義

西谷 正



していたことから、首長層の居館や共同体の祭殿などの機能が推測される。つまり、そこは大規模集落の中核部といえる。

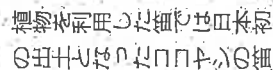
つぎに、弥生時代中・後期の墳墓を見ると、カメ棺や箱式石棺などからなる墓王墓をも営んだ王都でもあったといえるわけである。

未解決問題も山積

「魏志倭人伝」検証の好素材

彌生の生活知る宝庫

各地の中心部には、掘り立て
柱建物を、それを取り巻く柱が
見つけた。板壁に囲まれた中核
的施設として、祭壇のような機能が推
定されている。この中心部は、



したが、匠の土遣跡の発掘は、まだ全体のわずか三分の一に過ぎない。したがって本調査の問題は、わいり残りにいる。上の土遣の鉄器などの生産土層は都市的機能を示す内部構造はよくわかっていない。水田遺構もそうだ。しかし、土遣の整備・活用も話題にのぼるようになっていまい。その際、おきまに土遣の保存を第一義的に考え、佐賀県古野や土遣跡などの先行事例を参考にしながら、ひびいて取り組んでいくという問題。



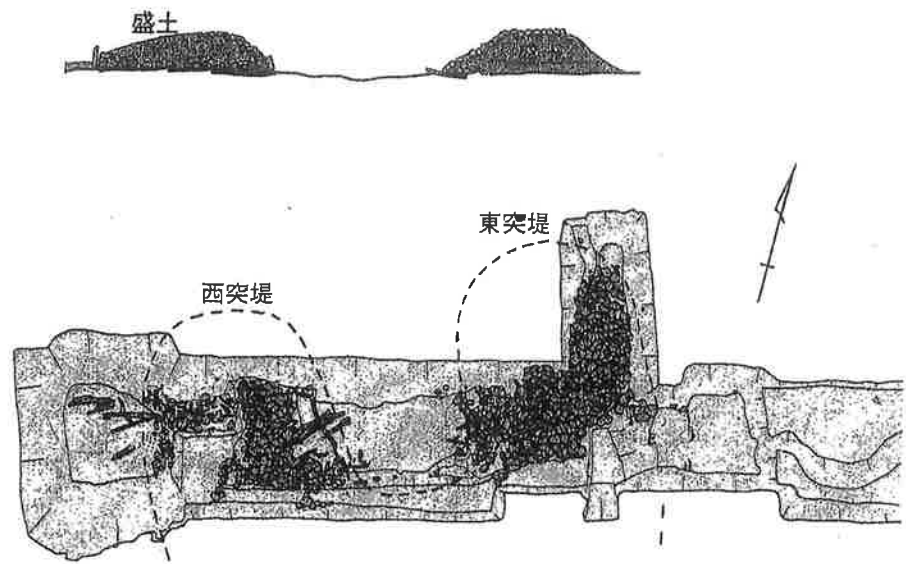
弥生時代後期の河道・環濠・溝の状況図（破線は推定ライン）

長崎県教育委員会、2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』『原の辻遺跡調査事務所調査報告書』第30集

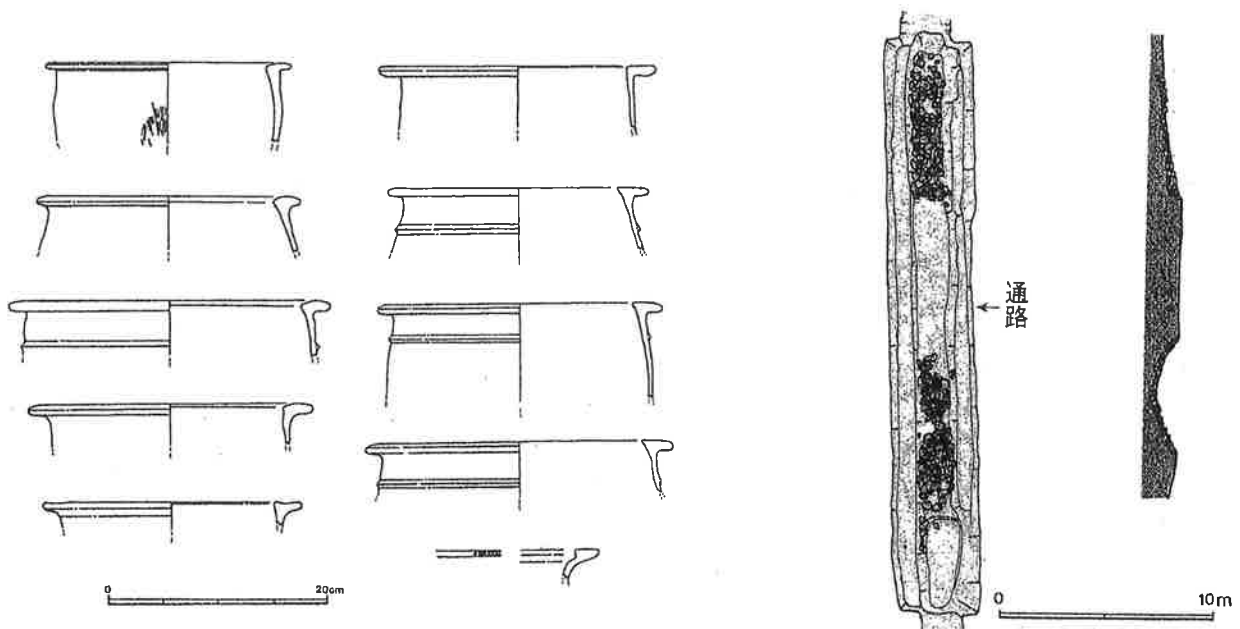


西側低地部の環濠等状況図

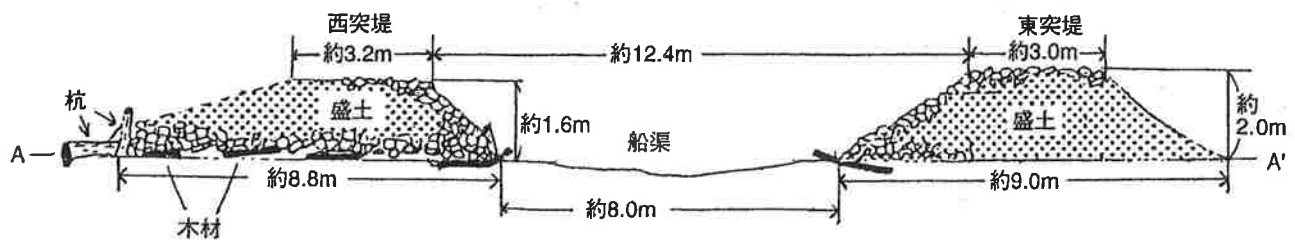
長崎県教育委員会, 2005 『原の辻遺跡 総集編 I』



船着き場跡実測図



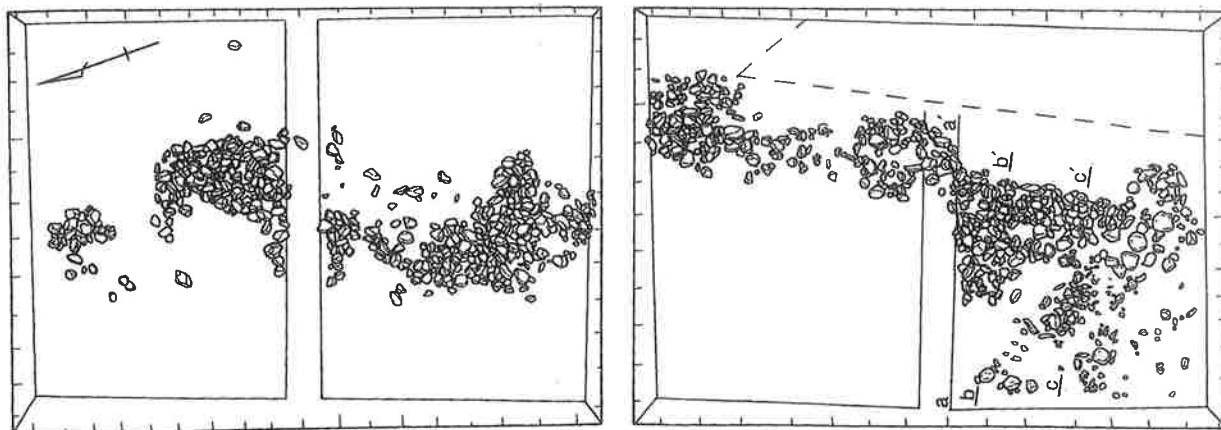
船着き場跡出土土器



突堤断面模式図

長崎県教育委員会, 2005『原の辻遺跡 総集編 I』

船着き場跡実測図



護岸遺構平面図 (1/240)

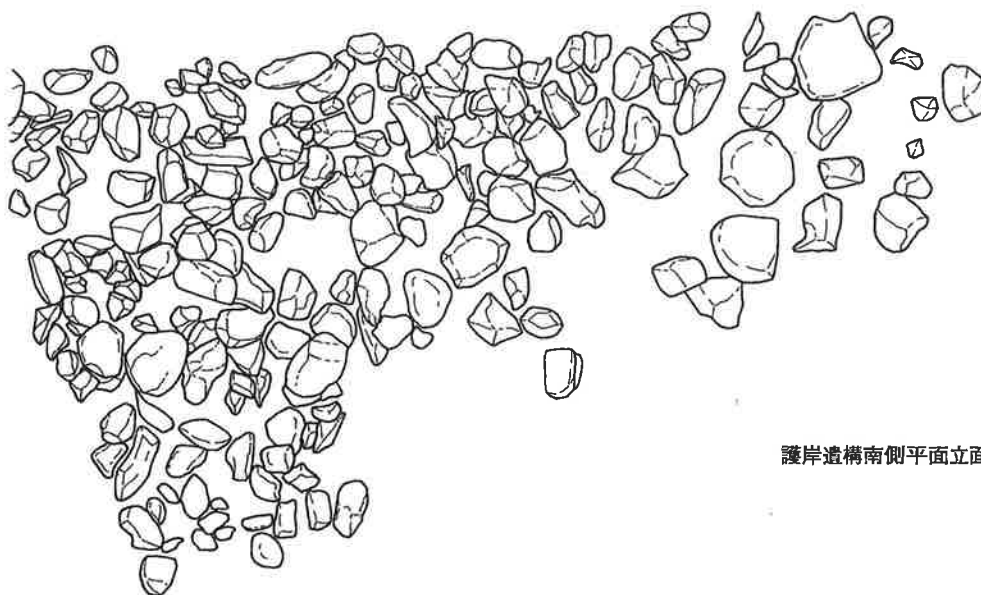
b LH=5,000



c LH=5,000

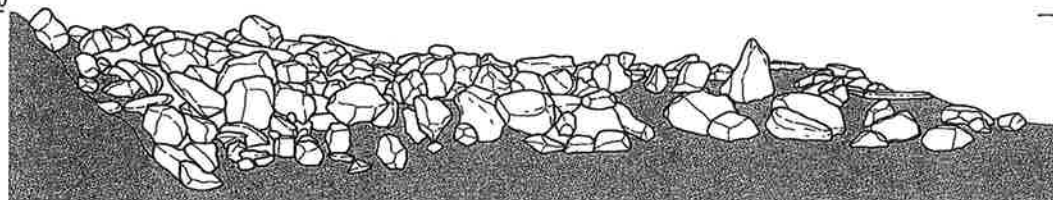


護岸遺構断面図 (1/80)



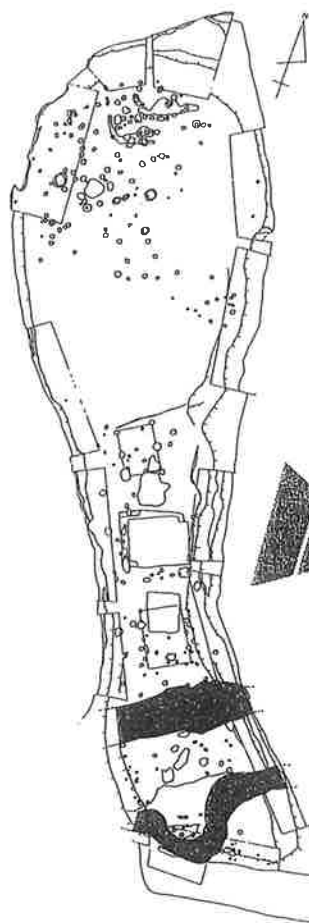
護岸遺構南側平面立面図 (1/60)

LH=5,000



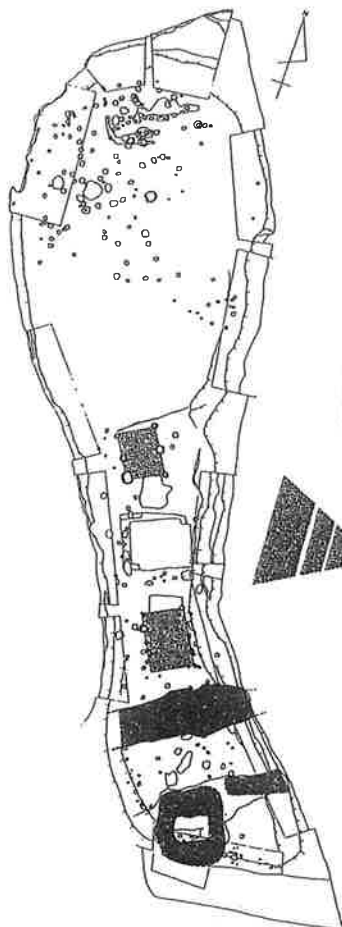
護岸遺構実測図

長崎県教育委員会, 2005 『原の辻遺跡 総集編 I』



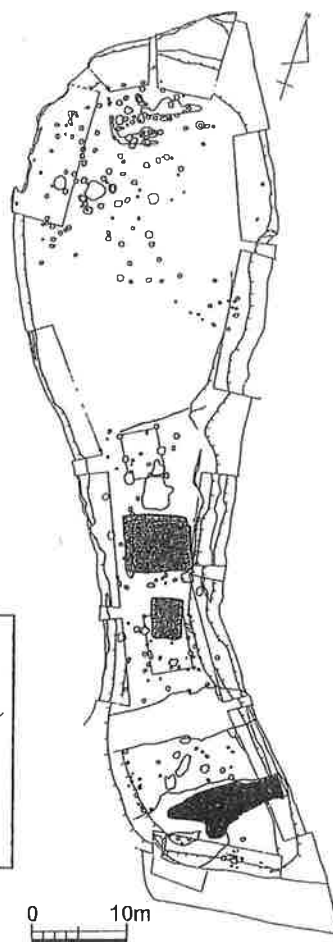
弥生時代中期

- ・祭儀場南端部に2条の環濠が掘削される。
- ・北側環濠は東西方向に直線的に伸びるが、南側環濠は「コ」の字形に南側に張り出し、張り出し内部にピットが散在する。環濠床面にもピットが散在する。
- ・北端部にはピットが散在する。



弥生時代後期

- ・北側環濠は弥生時代中期に引き続き存在する。
- ・「コ」の字形に張り出していた南側環濠は、張り出し部を中心に浅く掘り直される。同時に張り出し部に接続するように北側を「コ」の字形の溝がめぐり、周溝状遺構となる。
- ・北側環濠以北には、掘立柱建物が展開する。特に、1号建物・2号建物は、尾根に沿ってほぼ直線上に並ぶ。
- ・北端部にはピットが散在する。

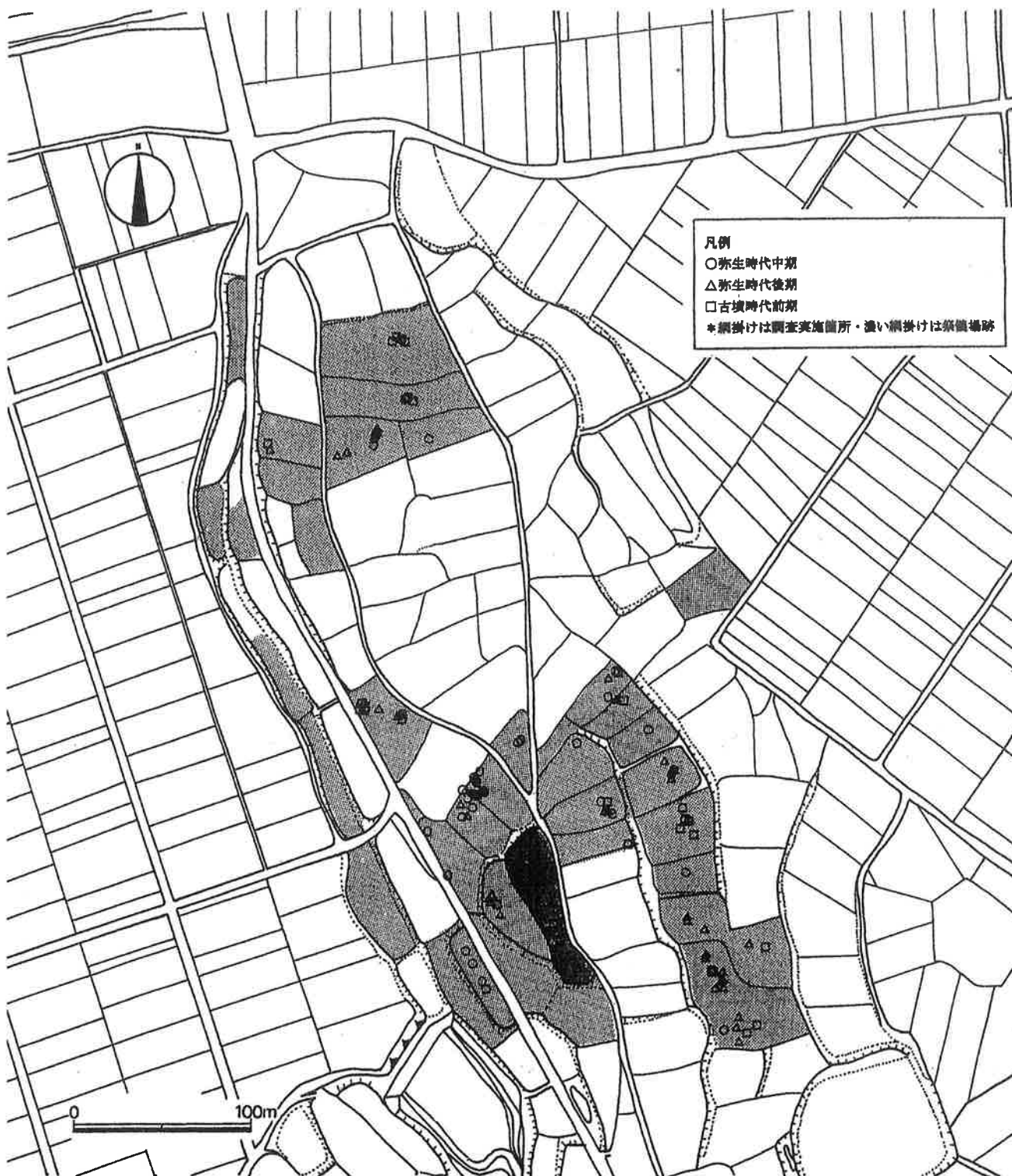


古墳時代前期

- ・北側環濠が埋没する。
- ・周溝状遺構が埋没し、新たに溝が掘削される。平面形は不規則であるが、祭儀場以東に展開し西側へは伸びない。
- ・埋没した北側環濠に隣接して、北側に竪穴住居が2棟並ぶ。
- ・北端部にはピットが散在する。

祭儀場変遷想定図 (1/800)

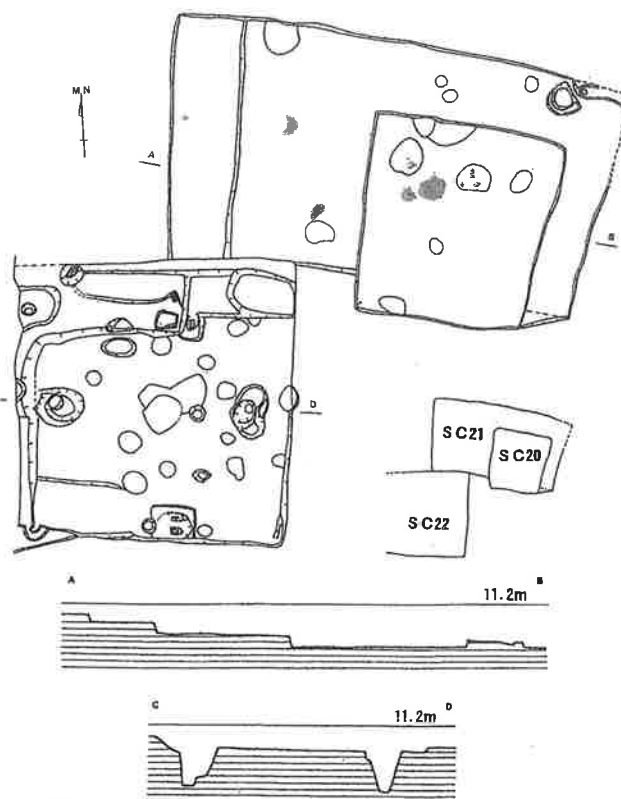
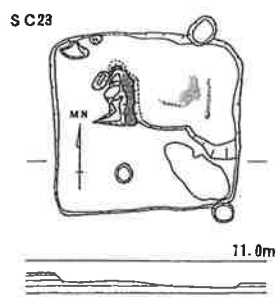
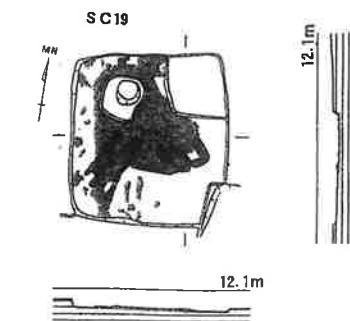
長崎県教育委員会, 2005 『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』



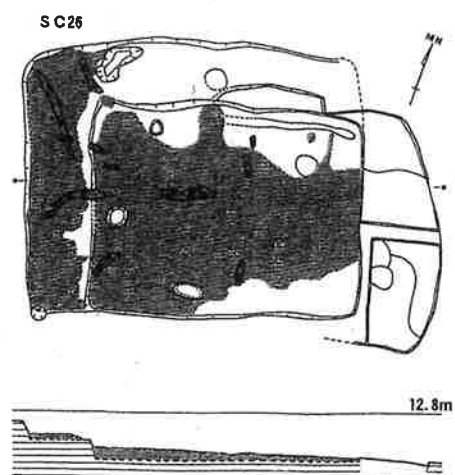
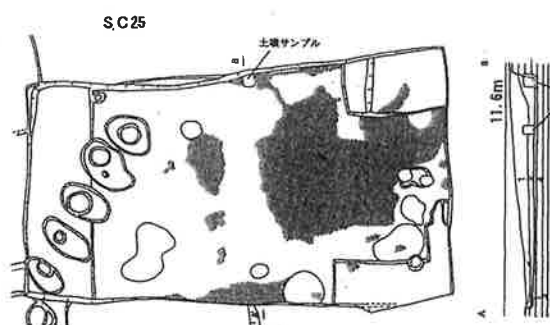
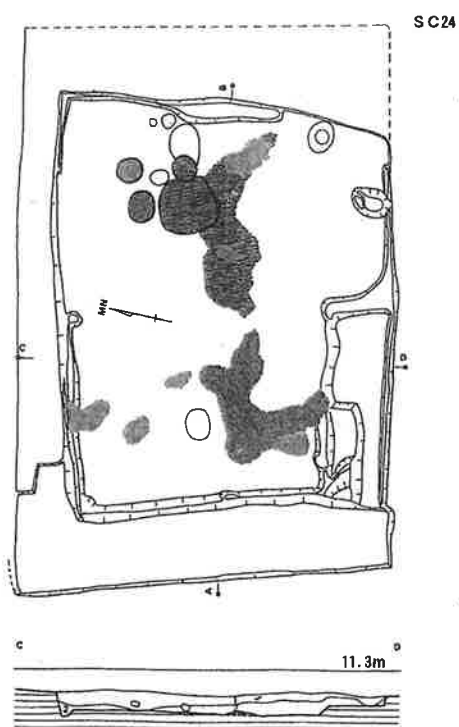
(藤村・中尾2003より一部改変)

竪穴住居跡時期別分布図

長崎県教育委員会, 2005 『原の辻遺跡 総集編 I』



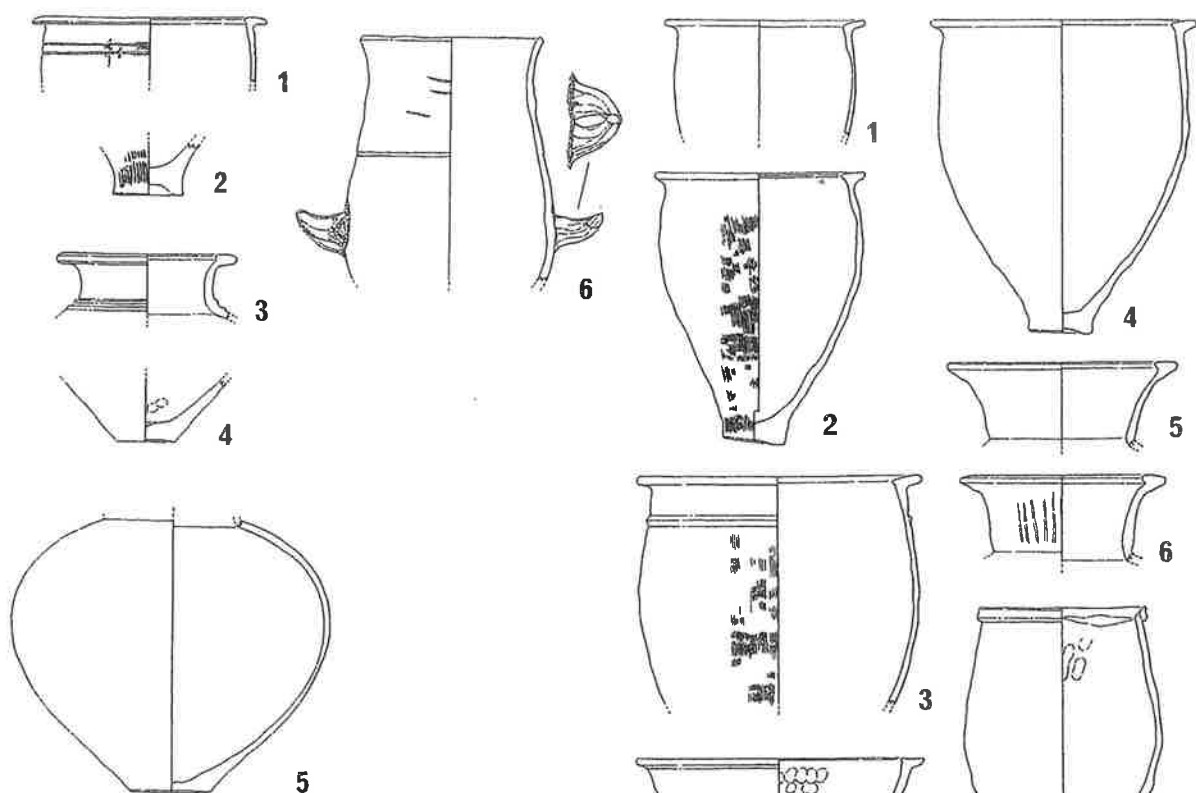
凡例
アミは黒土



0 5m

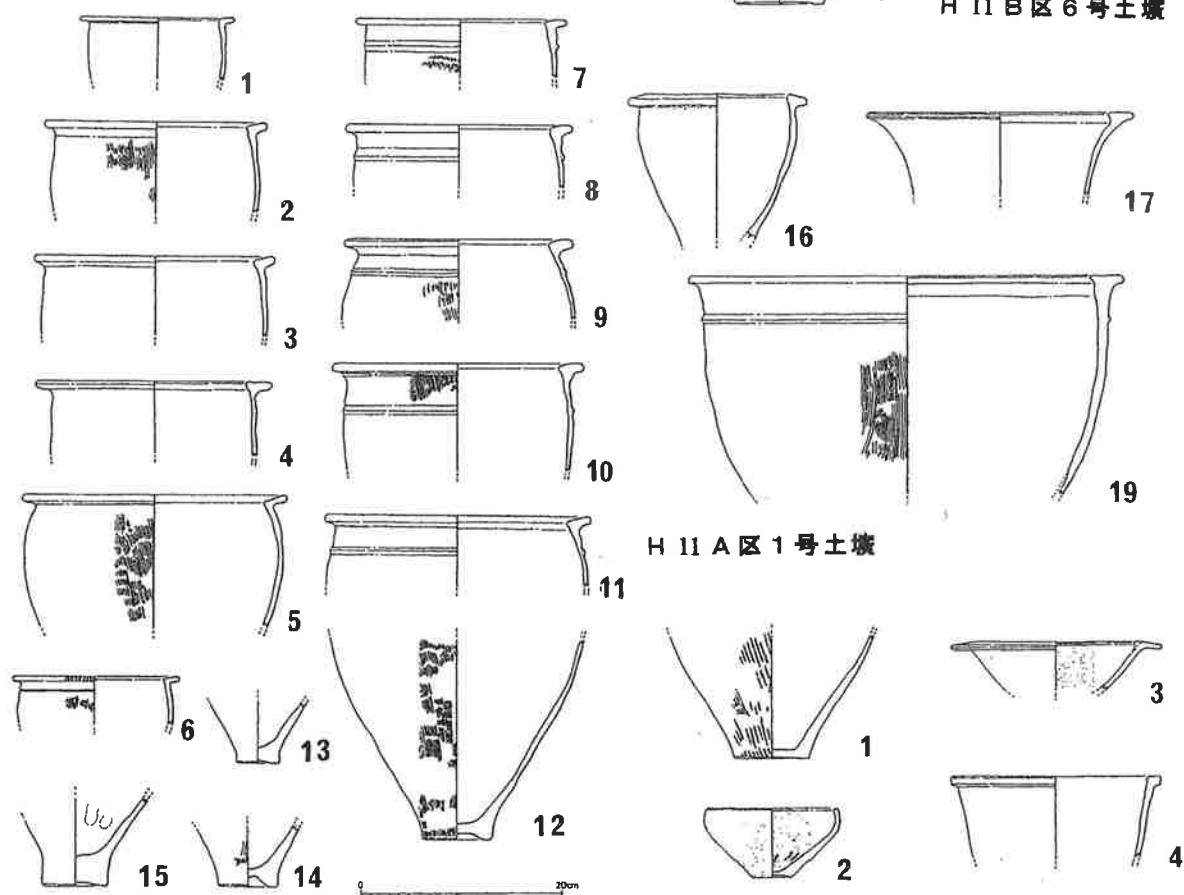
原地区の住居跡④ (1/120)

長崎県教育委員会, 2005 原の辻遺跡 総集編 I



H 10 E 区 16 号土坑 (三翼鉄出土)

H 11 B 区 6 号土坑

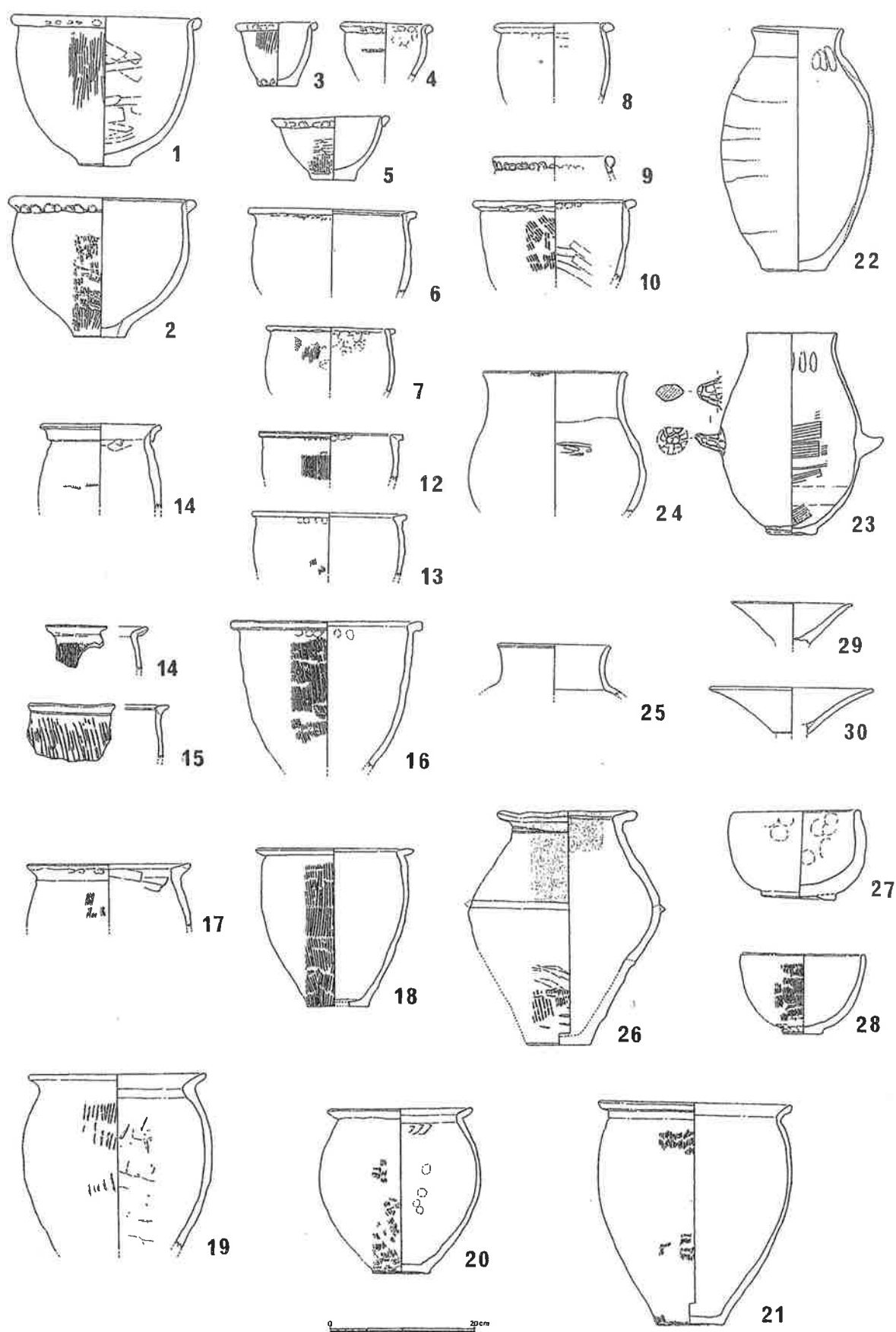


H 11 A 区 1 号土坑

H 10 E 区 1 号土坑

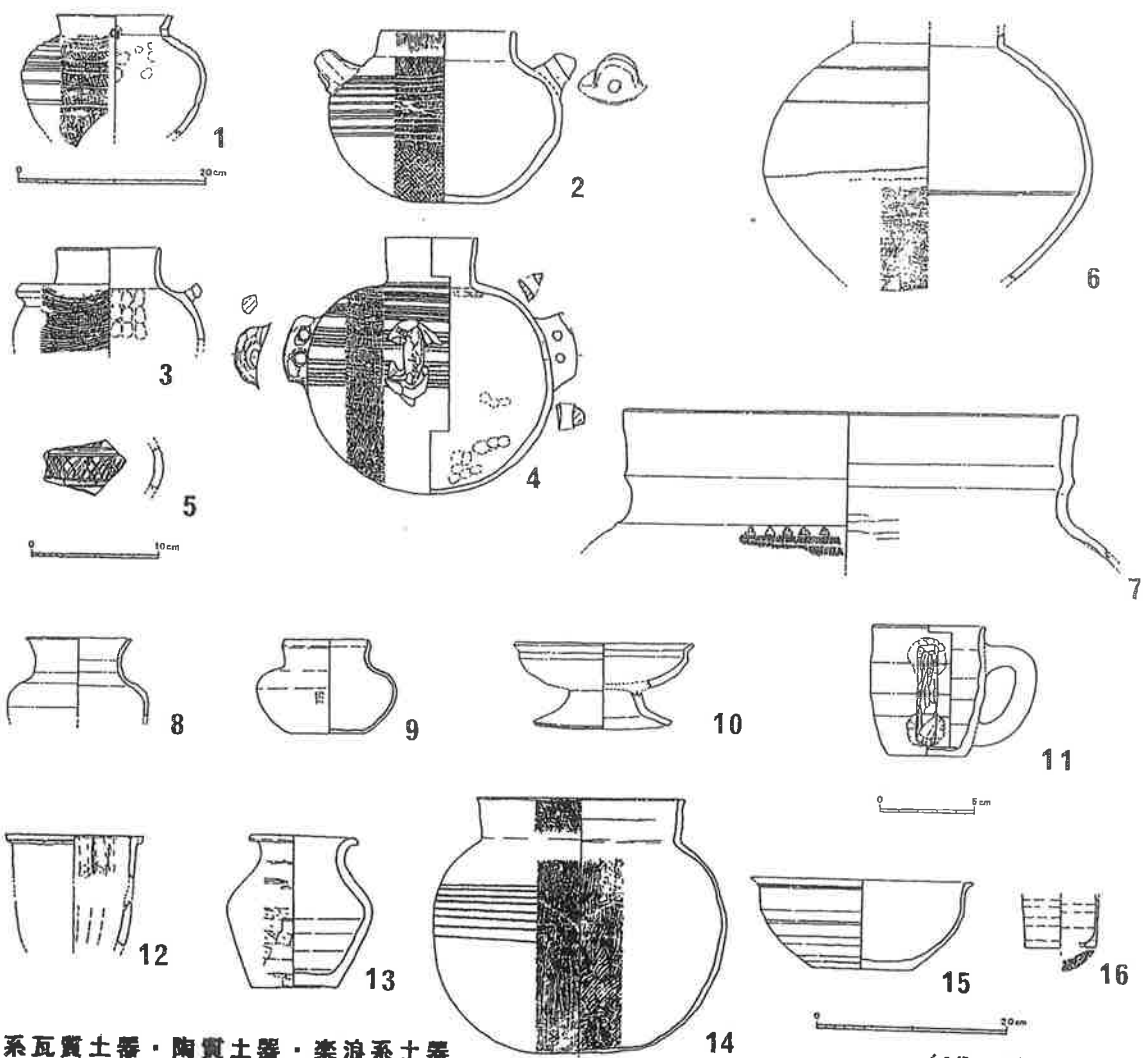
朝鮮半島系土器と共伴した弥生土器 (1/8)

長崎県教育委員会, 2005 『原, 辻遺跡 総集編 I』



無文土器・擬無文土器 (1 / 8)

長崎県教育委員会, 2005 年 原 3 遺跡 総集編 I



楽浪土器（6・12～16）、三韓土器（1～5, 7）、陶質土器（8～11）

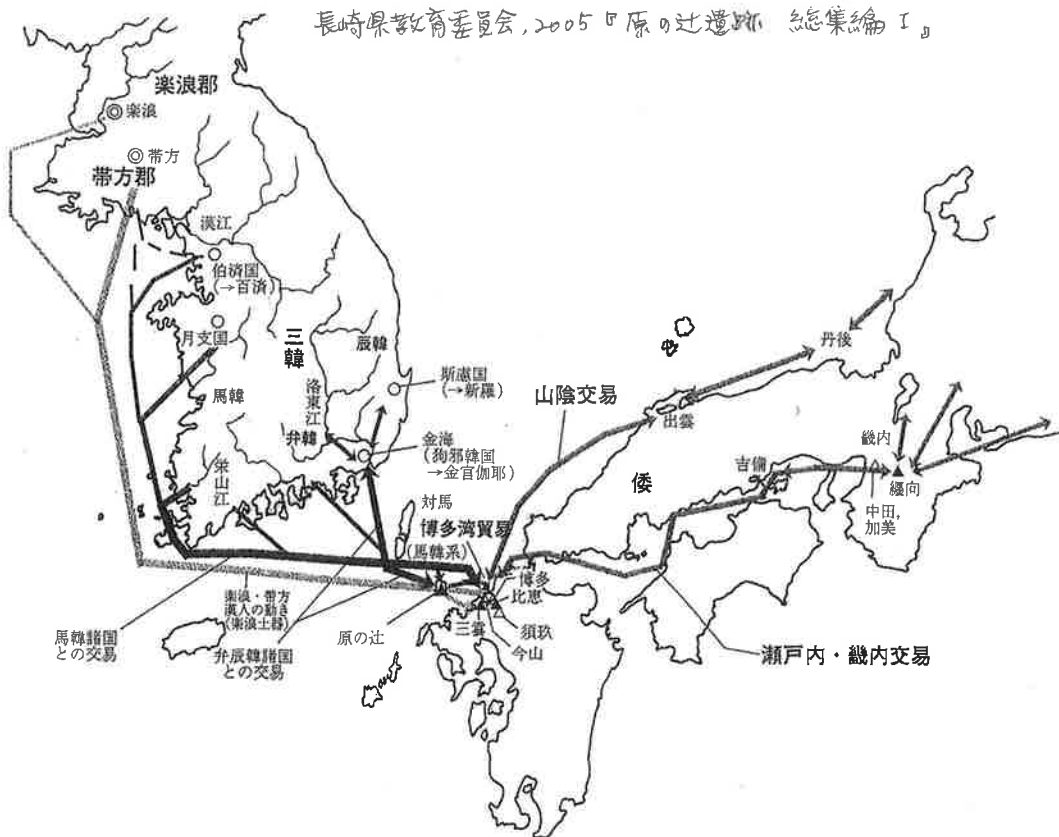
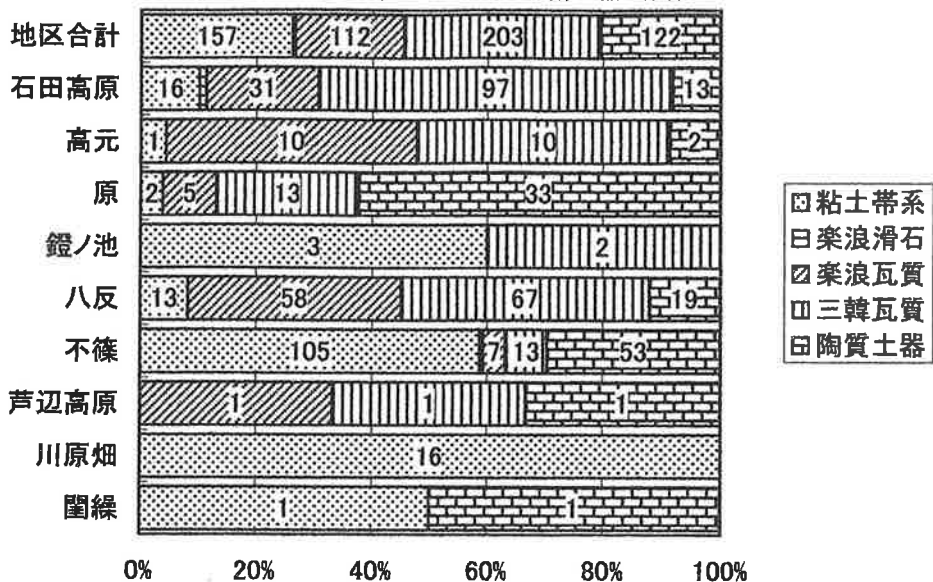


楽浪系瓦質土器（左）と三韓系土器
長崎県教育委員会、2005『原9辻遺跡 総集編Ⅰ』

地区別にみた朝鮮半島系土器の出土点数

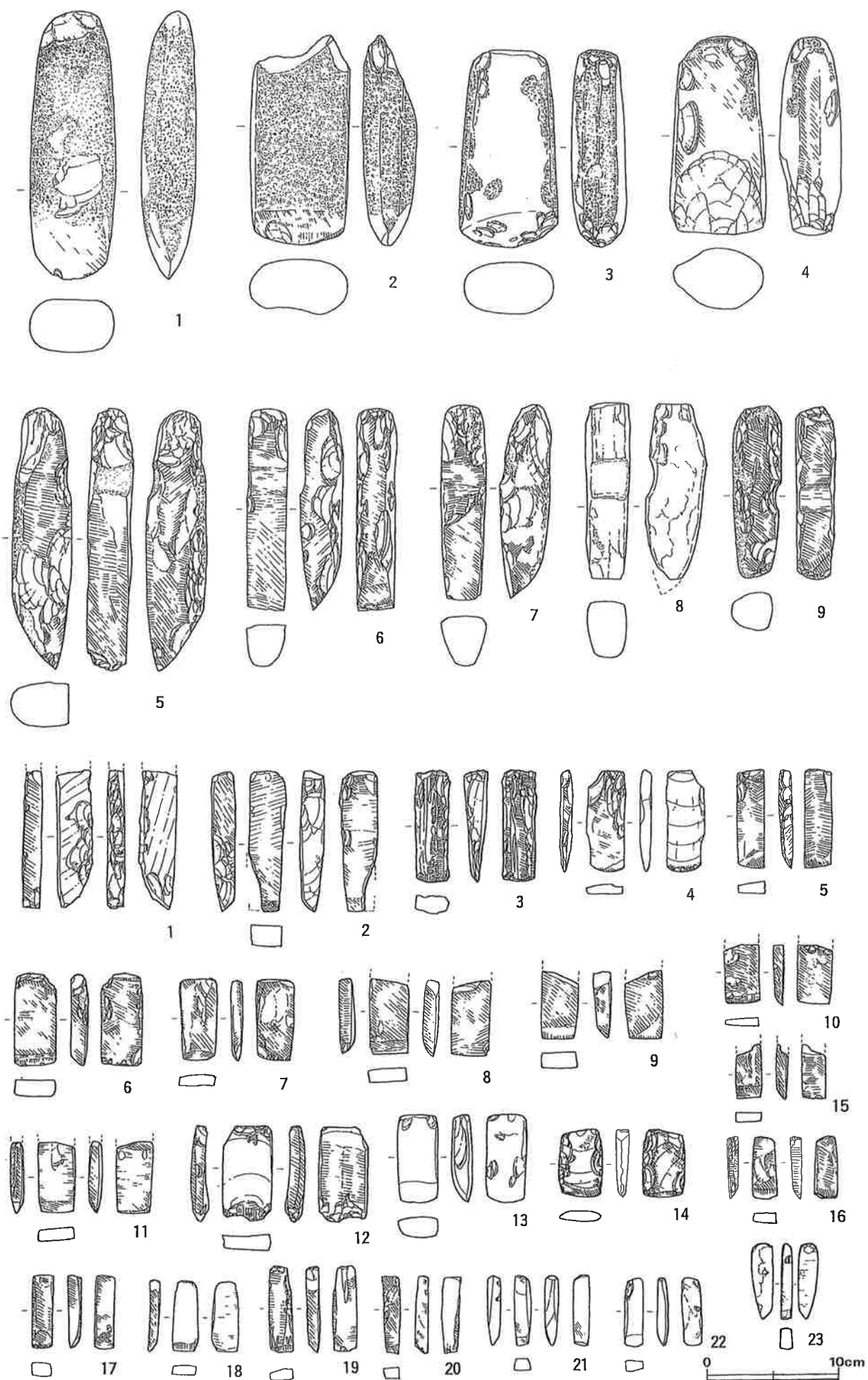
地区	粘土帶系	楽浪滑石	楽浪瓦質	三韓瓦質	陶質土器	合計
閩繰	1				1	2
川原畑	16					16
芦辺高原			1	1	1	3
不篠	105	1	7	13	53	179
八反	13		58	67	19	157
鍔ノ池	3			2		5
原	2		5	13	33	53
高元	1		10	10	2	23
石田高原	16	2	31	97	13	159
地区合計	157	3	112	203	122	597

地区内における朝鮮半島系土器の割合



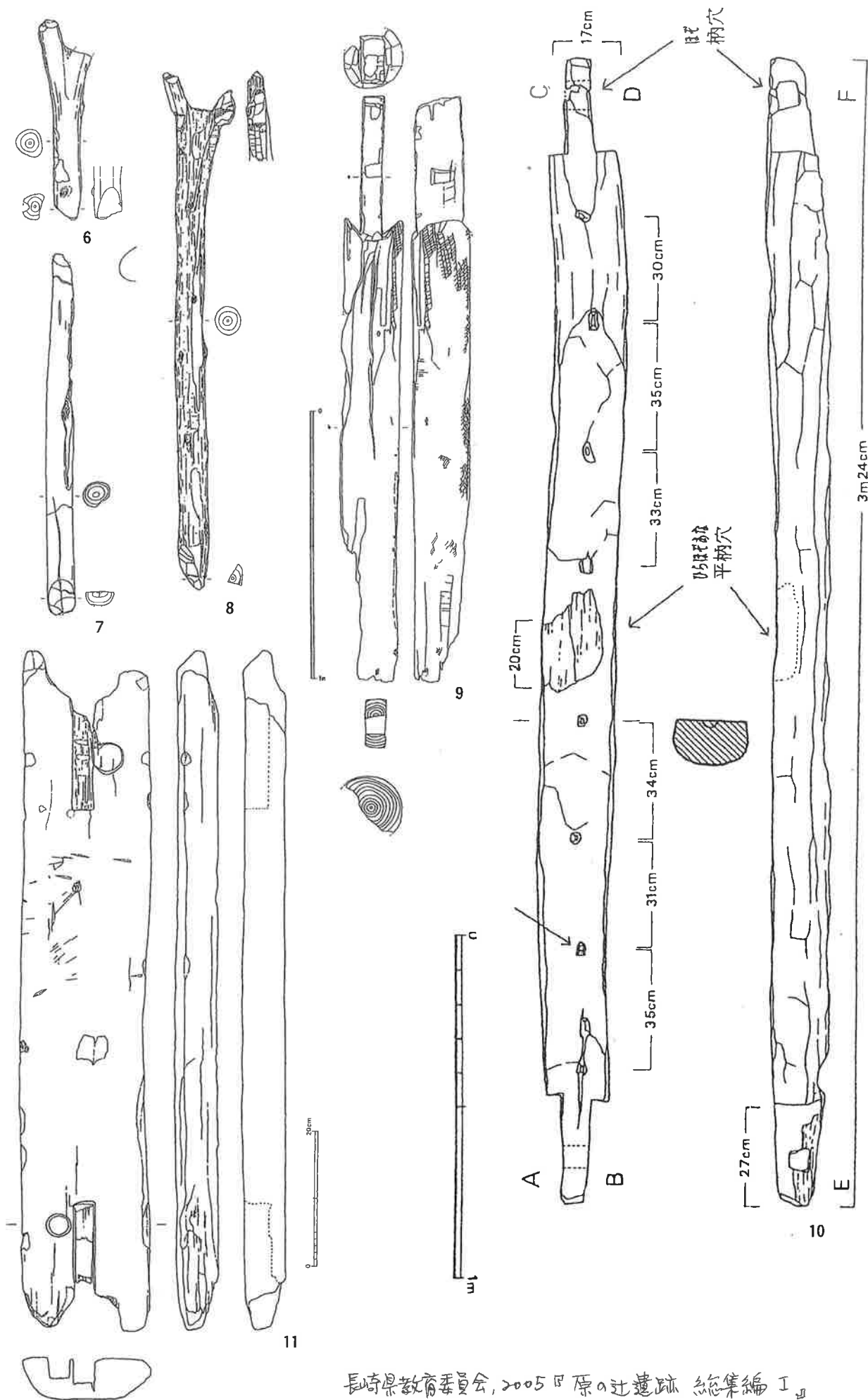
「原の辻＝三雲貿易」から「博多湾貿易」（前期）への移行
（ⅠB期～ⅡA期）

久住猛雄, 2007「博多湾贸易」の成立と解体」『考古学研究』第53巻第4号



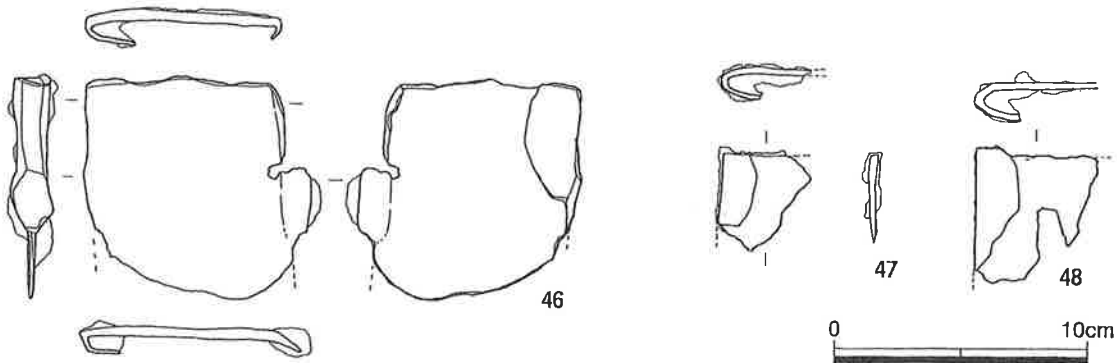
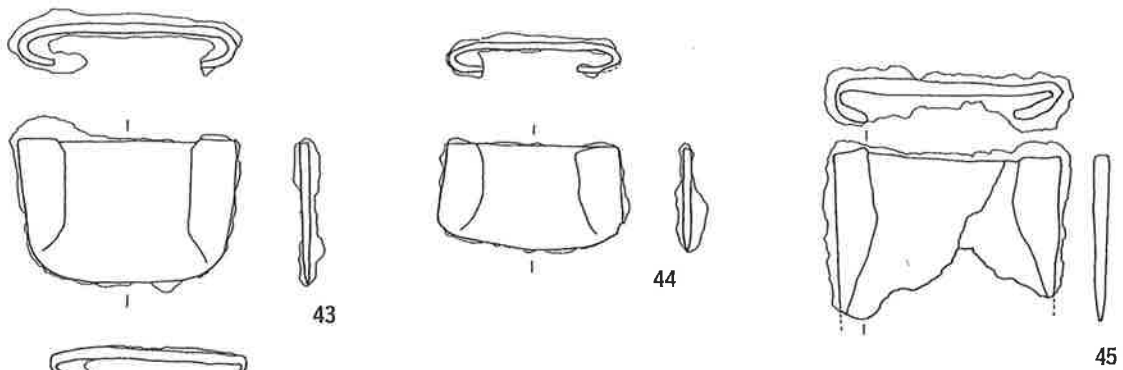
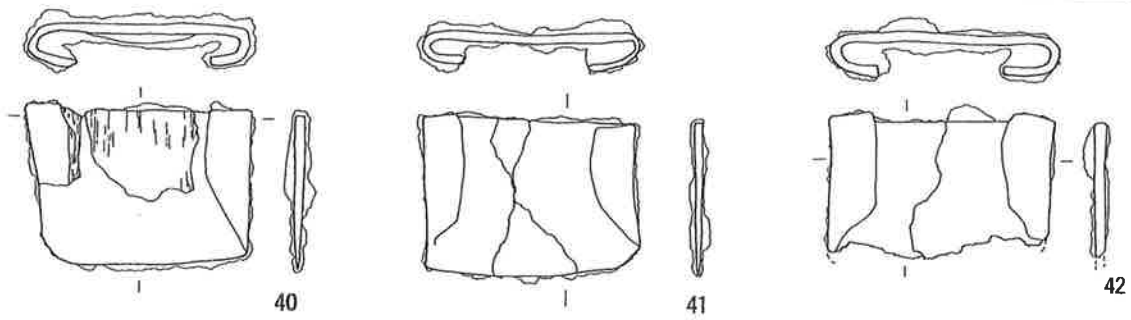
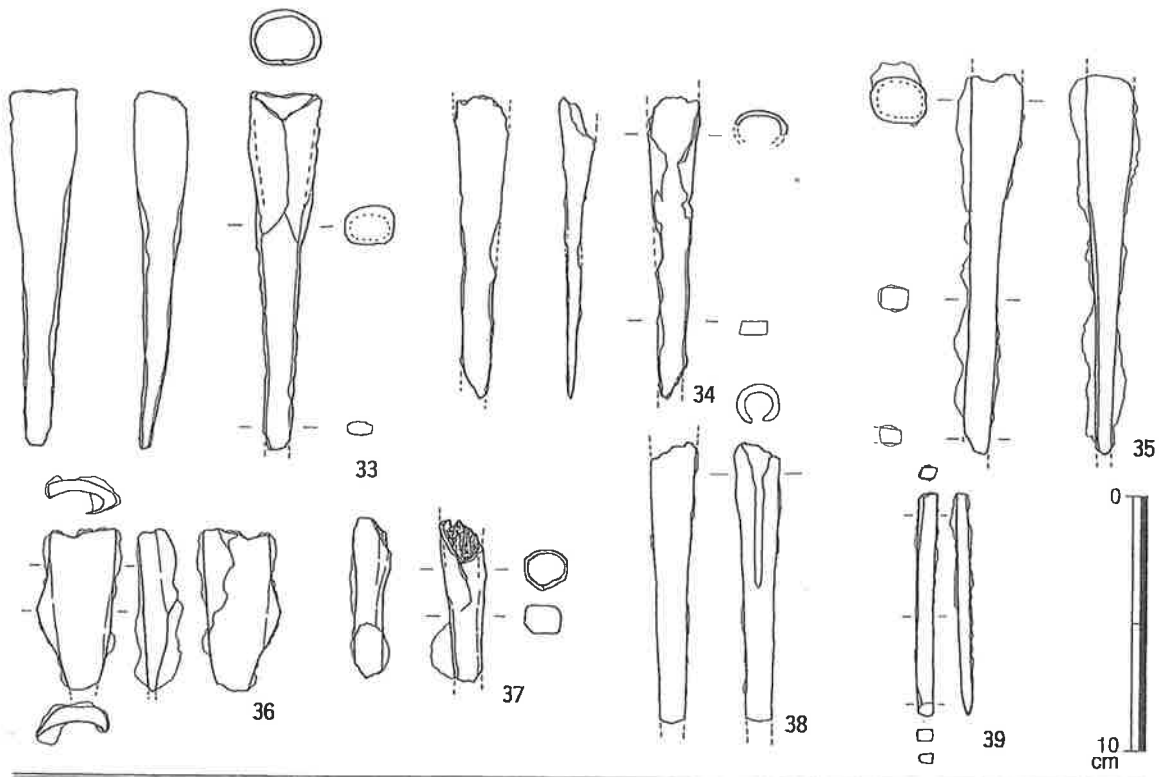
石斧類実測図 (1/4)

長崎県教育委員会, 2005 年 9 月 現在 遺跡 総合編 I



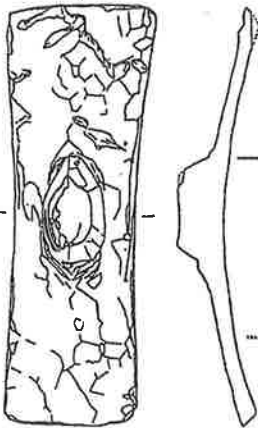
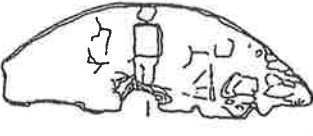
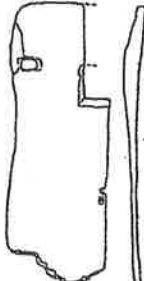
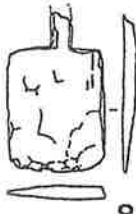
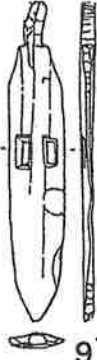
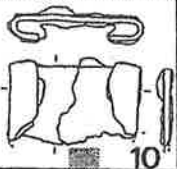
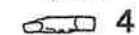
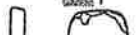
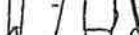
長崎県教育委員会, 2005 原の辻遺跡 総集編 I

建築部材実測図



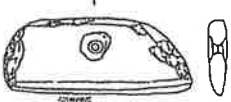
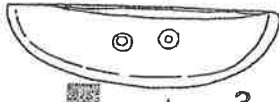
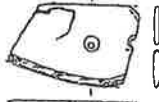
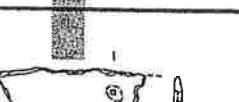
鉄器実測図 (工具, 農具1) (1/3)

長崎県教育委員会, 2005 『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』

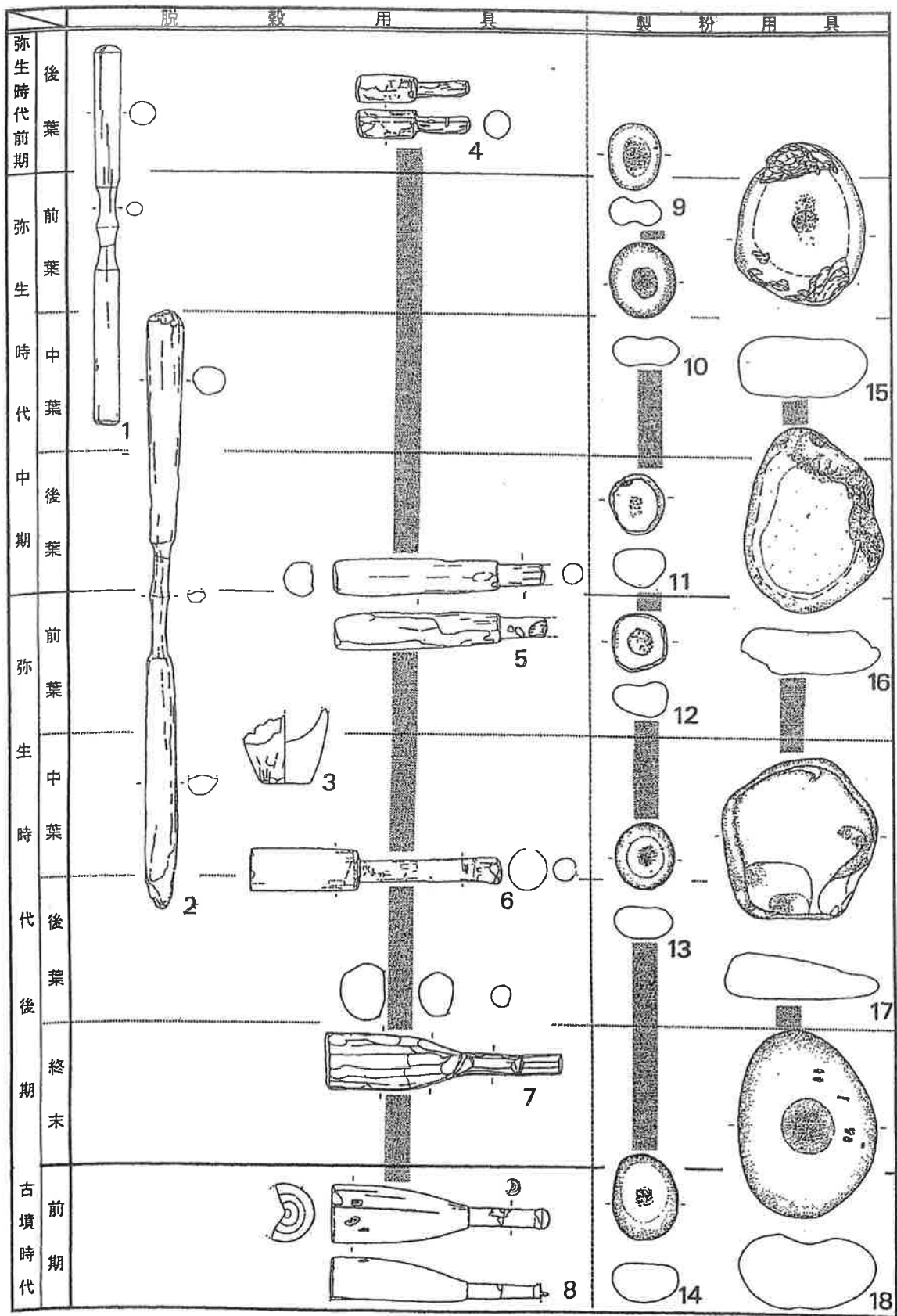
		開 墾 ・ 耕 作 用 具	
弥生時代前期	後葉		
	前葉		
弥生時代中期	中葉	 	
	後葉	     	
弥生時代後期	前葉	     	
	中葉	     	
弥生時代後期	後葉	     	
	終末	     	
古墳時代	前期	     	
	後期	     	

原の辻遺跡出土農耕具編年試案①

中尾篤志, 2004 「「支国」における生産基盤」『考古論集』

		收 穫 用 具			
弥生時代前期	後葉				
	前葉				
	中葉				
	後期				
	前葉				
	中葉				
	後葉				
	終末				
	古墳時代前期				
	後期				

原の辻遺跡出土農耕具編年試案②



原の辻遺跡出土農耕具編年試案③

原の辻遺跡出土の自然遺物

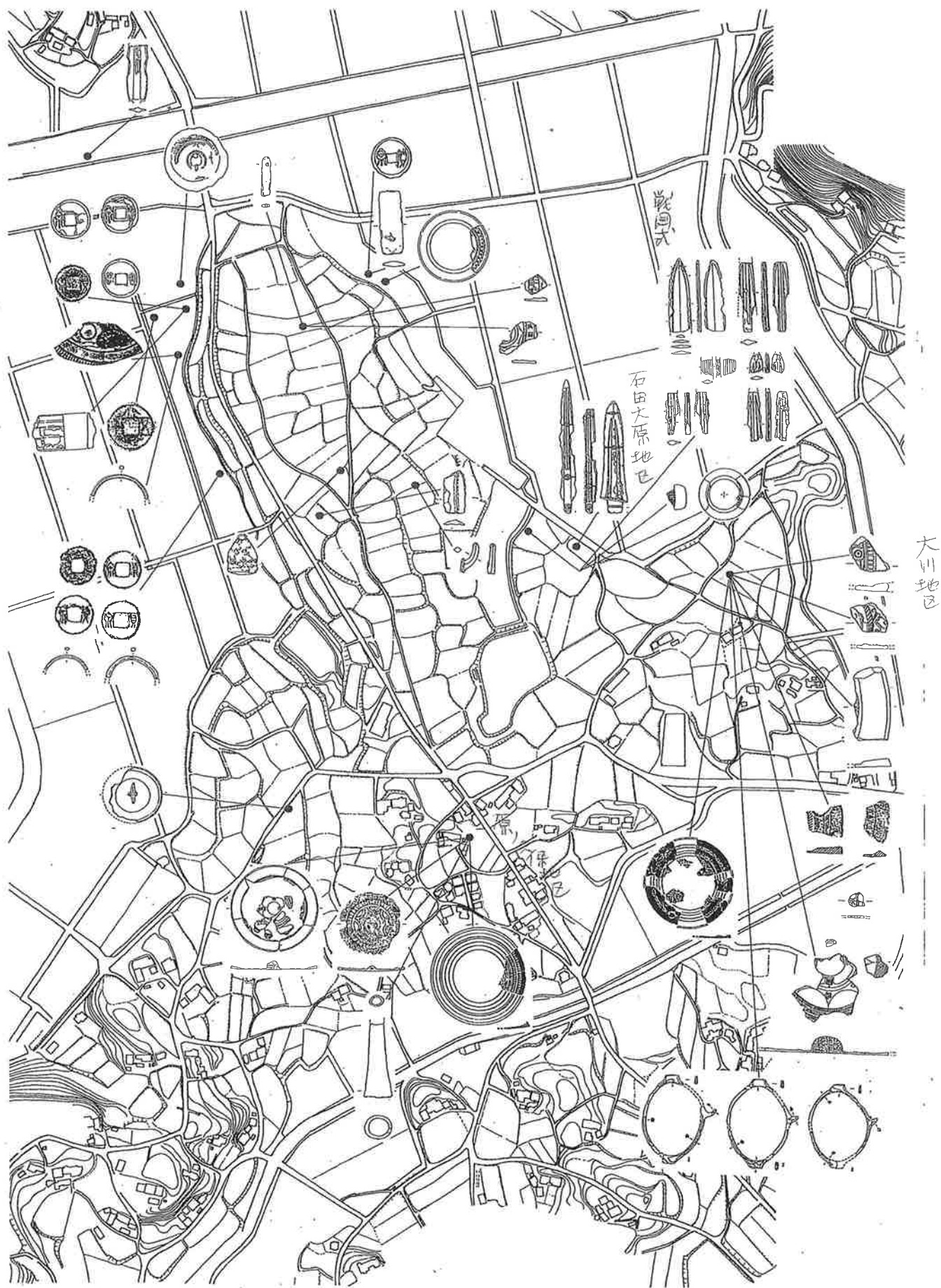
植 物	動 物				
	哺 乳 類	鳥 類	爬 虫 類	魚 類	貝 類
イネ	クマネズミ属の一種	ガンカモ科	ヘビ科の一種	マダイ	スガイ
コムギ	ノウサギ	キジまたはヤマドリ		クロダイ	サザエ
アワ	ウマ	ワシ・タカ科		カンダイ	ウミニナ
マメ類	イノシシ	カイツブリ科の一種		ベラ科の一種	クボガイ
ウリ類	アカシカ			マフグ科の一種	イボニシ
ヒョウタン類	ニホンジカ			フサカサゴ科の一種	クマノコガイ
キカラスウリ	イヌ			コチ	コシダカガンガラ
カヤ	タヌキ			サメ類	オキシジミ
イヌガヤ	テン			ヘダイ	オキアサリ
ヤマモモ	カワウソ				コシダカサザエ
ヒメコウゾ	鯨目の一種				チョウセンハマグリ
キイチゴ属	イルカ科の一種				オオコシダカガンガラ
スモモ	アシカ科				マガキ
サルナシ属					イシダタミ
ヒシ					アワブネガイ
シマサルナシ					ハネナンシヨウラク
サワグルミ					レイシ
クワ属					ヒメクボガイ
ツルコウゾ					カニモリガイ
ブドウ属					アワビ類
コナラ属					エガイ
シイ属					イタヤガイ
ムクノキ					サルノカシラ
					マツバガイ
					シロアオリガイ
					ヒリョウガイ
					フチムラサキレイシガイダマシ
					キヌザルガイ
					アカニシ

原の辻遺跡における種実同定

資料提供：原の辻遺跡調査事務所

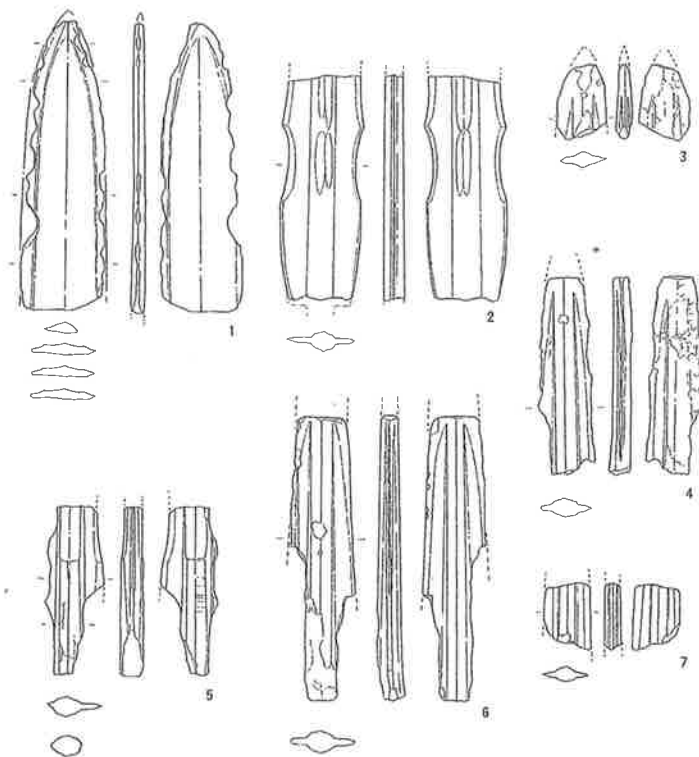
学 名	部 位	I 区 4 号 溝 断 面 7 層	I 区 1 号 溝 基 盤	I 区 凹 地		I 区 1 号 溝	
				1	2	1	2
arbor	木本						
<i>Myrica rubra</i> Sieb. et Zucc.	ヤマモモ	核		4			1
<i>Castanopsis</i>	シイ属	堅果		1	1		
<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ	核		3	7		2
<i>Morus</i>	クワ属	種子	1				
<i>Broussonetia kazioiki</i> Sieb.	ヒメコウゾ	種子	1			5	6
<i>Broussonetia kaempferi</i> Sieb.	ツルコウゾ	種子					
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核	3	1	2	53	2
<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.	キハダ	種子					
<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Sieb. et Zucc.	カラスザンショウ	種子	1	2			
<i>Mallotus japonicus</i> Muell. Arg.	アカメガシワ	種子			1		
<i>Ilex integra</i> Thunb.	モチノキ	種子	1		1		
<i>Viris</i>	ブドウ属	種子					1
<i>Ampelopsis leucoides</i> Planch.	ウドカズラ	種子		1	9		
<i>Actinidia</i>	サルナシ属	種子	4		10	1	
<i>Actinidia rufa</i> Planch. ex Miq.	シマサルナシ	種子					18
<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	種子	3	1	2	18	
<i>Eurya japonica</i> Thunb.	ヒサカキ	種子	39	61	20	843	
<i>Cornus brachypoda</i> C. A. Mey.	クマノミズキ	核					1
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属	種子					
<i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.	エゴノキ	種子			1		
<i>Clerodendrum trichotomum</i> Thunb.	クサギ	種子					
<i>Sambucus Sieboldiana</i> Blume ex Griseb.	ニワトコ	種子	16	6	5	1	2
arbor+herb	木本と草本を含む						
<i>Araliaceae</i>	ウコギ科	種子	1	2	1	1	
herb	草本						
<i>Alismataceae</i>	オモダカ科	種子		2			
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎					2
<i>Gramineae</i>	イネ科		6				
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	果実	2	85	1		7
<i>Carex</i>	スゲ属	果実			1		
<i>Polygonum Thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	ミゾソバ	果実		2			
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実		11	31		
<i>Rumex</i>	ギンギン属	果実	27				
<i>Polygonaceae</i>	タデ科	果実					
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	41		1		
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	種子	62	1			3
<i>Ranunculaceae</i>	キンボウゲ属	果実		1			
<i>Cocculus orbiculatus</i> DC.	アオツヅラフジ	種子			1		
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科	種子	3		2		
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	3	1			1
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> Trautv.	ノブドウ	種子			1		
<i>Umbelliferae</i>	セリ科	果実	1	1	40		
<i>Solanaceae</i>	ナス科	種子	11	4	1		3
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ科	種子					1
<i>Compositae</i>	キク科	果実					3
arbor	木本		51	86	41	396	14
arbor+herb	木本と草本を含む		1	2	1	1	0
herb	草本		167	9	146	33	20
Total	合計		209	97	188	430	34

中尾篤志, 2004 「一支部」における生産基盤『考古論集』

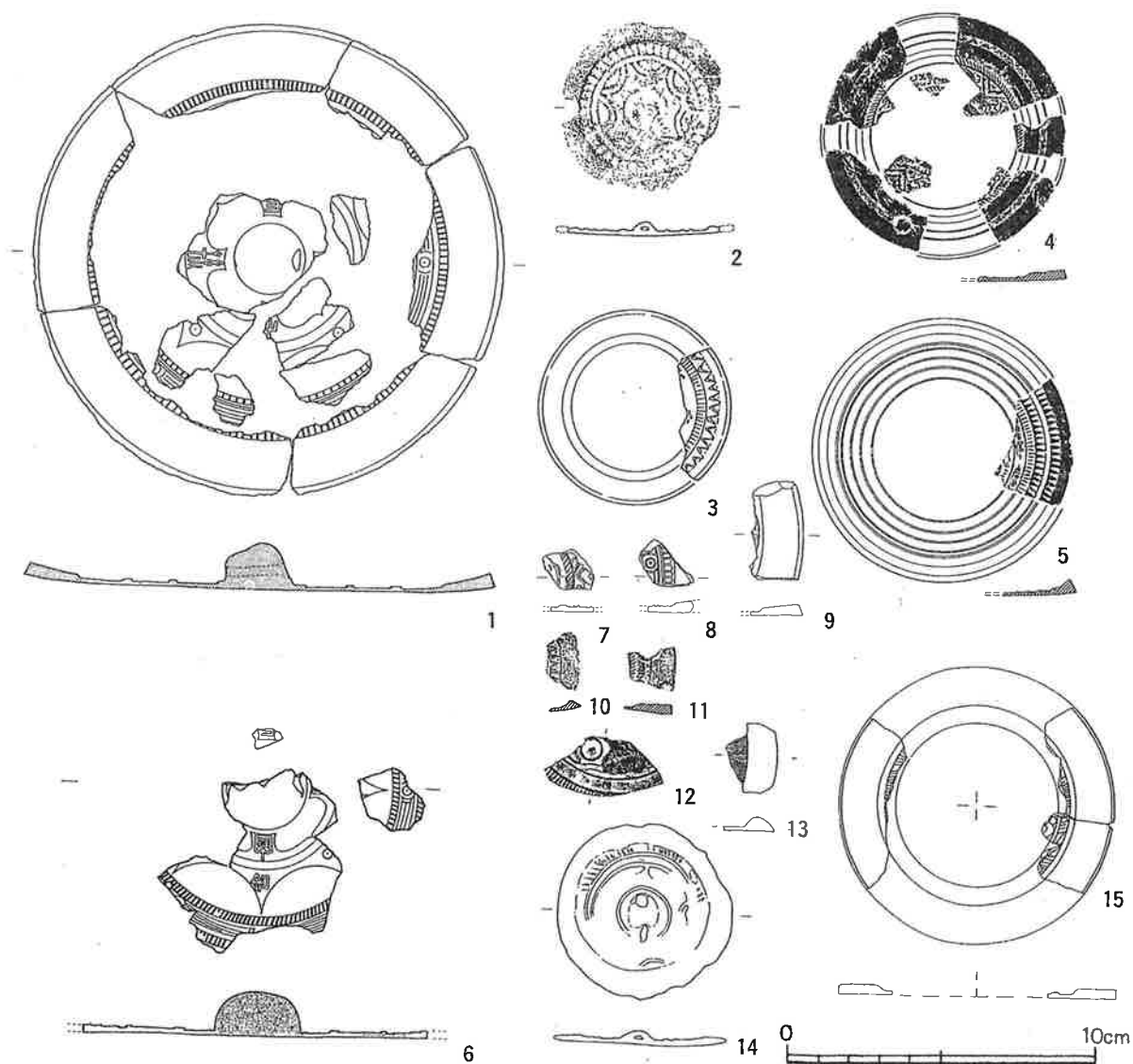


青銅製品出土及び表採地点（銅鏃を除く）

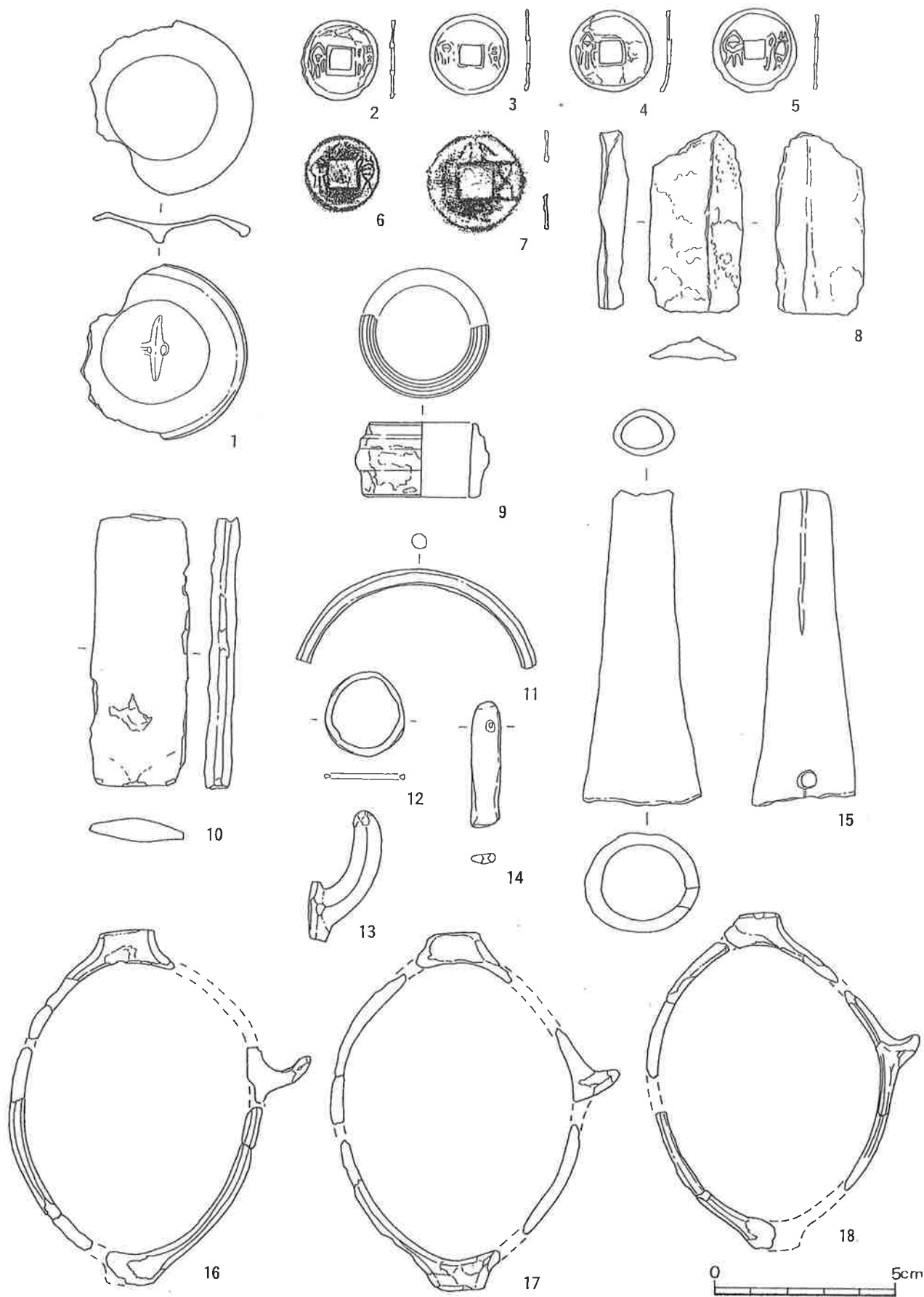
長崎県教育委員会，2005『原の辻遺跡・総集編Ⅰ』



銅劍突測圖

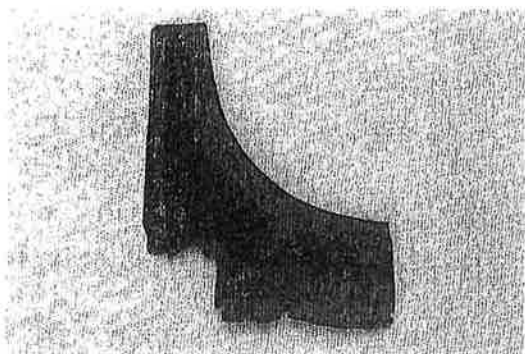


青銅鏡突測圖

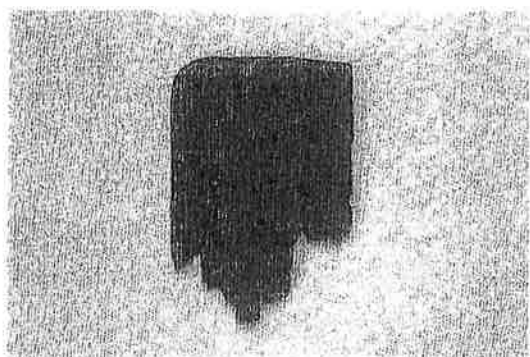


その他の青銅製品実測図

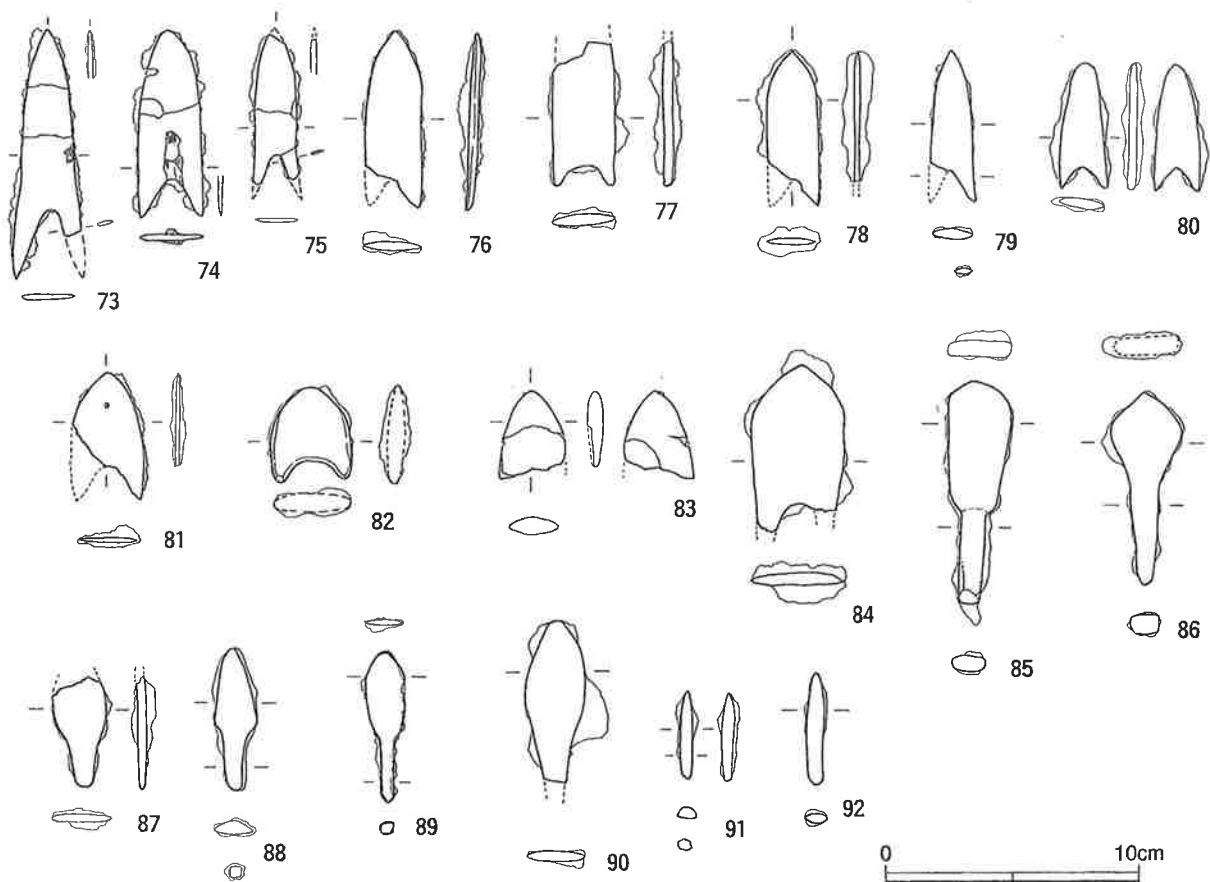
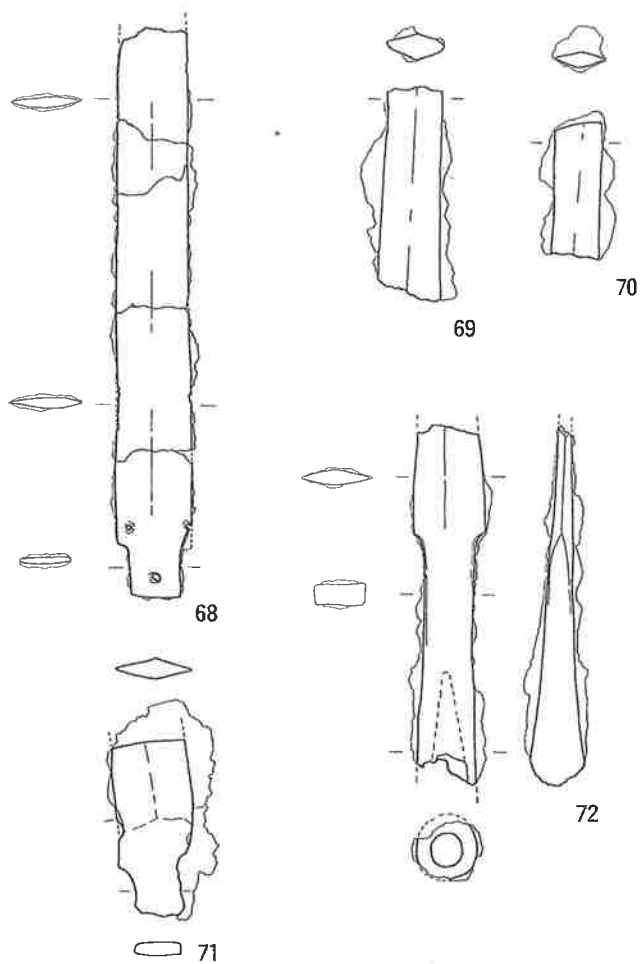
長崎県教育委員会, 2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』

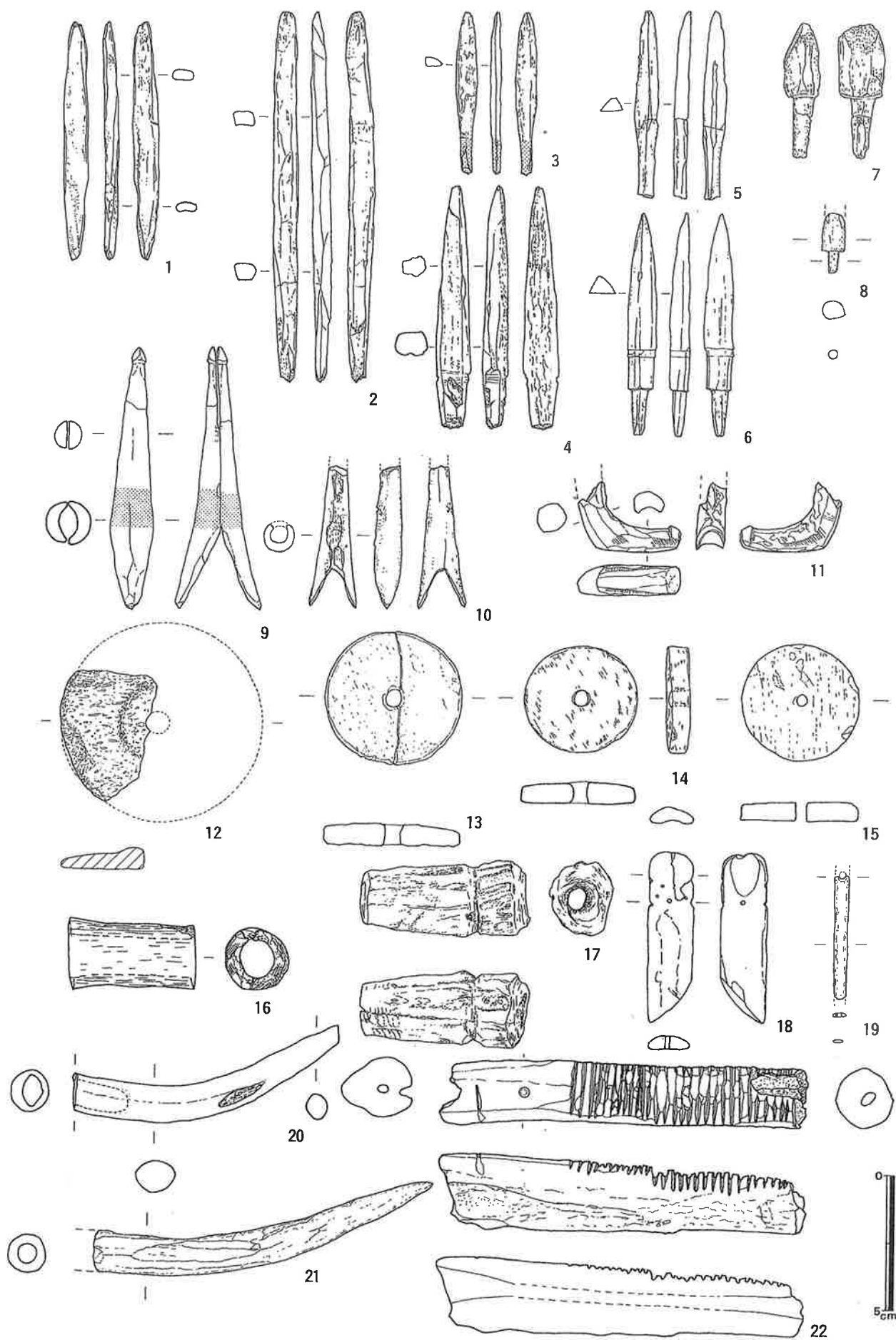


木製短甲（川原畑地区）／弥生時代中期／
長さ15cm



木製桶（石田高原地区）／弥生時代前期末
～中期初／



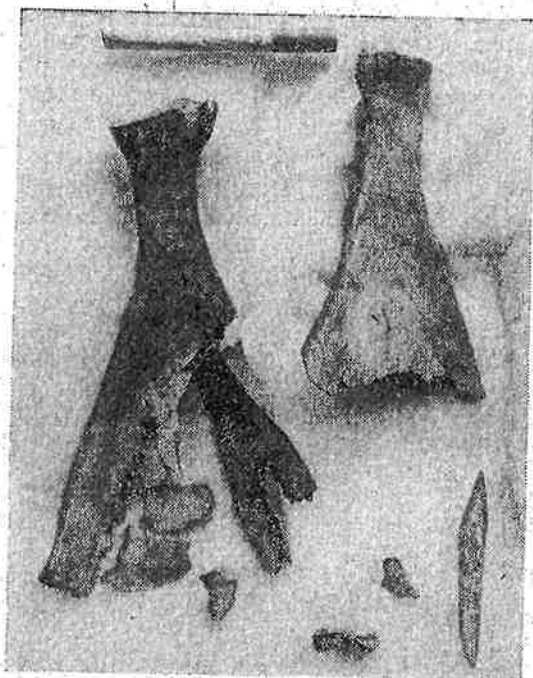


骨角器实测图

九大調查團

「倭人伝」を裏付け

を昇進の希望で、九州大学考古学教室のカラカミ遺跡調査団（团长　岡崎敦教）に於て三世紀初頭の「魏志倭人伝」の時代、占いに知れたシカの骨焼く出した。同團には「其の俗、事を拳(こぶ)にして行ふ」と云ふところあり、する所あれば、すなわち骨をかやり(か)きつとばひしと云ふ図を占ふ。先ずする所定む。其の辞は禽魚、れいき中国(鳥卜)の法の如く、火鉋(か)たらきめを焼て兆を占ふ」と記してあり、當時の耶馬台国では、中国が移植された動物の骨を使う占いの技術が国の行政、生活の命線に大きな影響を及ぼしていたことを示している。



ところが、これまで同じ時代に本では多く見つかっているのに、古いに使われた動物の骨は、裏目「舞志倭人伝」の舞合とされている。

窓口での発見に意義

伊藤道治・神戸大学教授（中国
代史・甲骨学の權威）の語

トナリ

（ついでに）の歴史は中国と日本
の間では数世紀のズレがあり、こ
の技術が初めて日本に移入され
弥生時代に、中国ではすでにさ
えていた。それにもかかわらず

占いの方式が中国と全く同じ發達をたどったことは興味深い。これは、朝鮮半島を經由したためと推測される。大陸文化移入の窓口で下層を窺見したこの視機は、大きく、農耕を含めた弥生時代の新しい文化受け入れのあり方を導きだした。貴重なる史料に思ふ。

る近畿以西の西日本では、これが初めてである。この発見は、同書の記事の正確さを裏付けるとともに、毫岐、対馬が国内における中興方式の占卜（せんぼく）の先進地たつとすることまでの學説を裏証し、また耶麻呂國時代の習俗解明

手のかかりになる考古学の本體
 重は收録して、關係書は別記する。
 カラカミ遺跡は長岡市喜能町に在る。本町より西東條にある昭和十二年の
 の暴露跡で、主として昭和十二年
 京大考古部を中心とする調査員
 考古学會が初めて手を付けた。
 九大の調査班は、ここ三月由緒
 旬に一回の調査を行い、去る
 十日から十日間の予定で、同目的の
 調査を続けた。去る三月の調査
 のとき、暴露跡のうの中にある
 い置しては、魚貝、獸骨類等が
 得り、九段學部解剖學教室に分
 析を依頼していた。考古學部でも
 ある岡部教授の水井博士が調査を
 べていたが、最近になつてその
 の中から、古いに使われ、シガの
 けん甲冑、布が露出された。
 當時、古いにはいつた動物の
 骨が使われたが、大半は力の特
 で、並行時代は古いのを、専ら
 ら厘下（かへく）と呼んでいた。
 四世紀以降の古墳時代からカメの
 甲が主になり、名称も厘下と變つ
 った。奈良、平城時代は古下
 の樂器、陶器の露出は多量になり、
 毫下（むさ）に變つた。毫下（う
 らへ）の制が設けられた。平安時
 カラカミ遺跡でみられた古い
 のカメの骨（左）。下の方に焼
 けだけの線が見えらる。右のも
 のは半分が欠けているが、
 古いに使ったものか、か確認
 できない（九州大學考古部
 發見品）

現代の年中儀式や職制をまづめたる。「延喜式」には、当時の卜筮に對し「易・書・禮・伊呂巴五入の計二工」とある。人々が常用した古い記があらうといふに、春・秋・史記が古代から中國方式の占卜の類籍をよく傳承し、國内でも指導的地位を占めていたことを物語っている。

一 對馬・土鼓(つづみ)の雷(かみなり)のこと
すなわち神社は、現在も稲の行事が残っており、この地にても昔から古の習俗が民間の間に傳へられてゐたことがわかる。岡崎神社とともに力三・三邊跡の稲垣郷をしていふ岡谷正・助教授は「國內における和神方式の占卜は、對馬、壹岐、壱岐に東に広またと見るのが世界の定説で、記だけがあつて実物がないところがあるが、やつと解漏された、出るべきものがここにいつし附して、これまで見からなかつたのが、むしろ不思議なくらいだ。それと同時に、西日本の他の發祥地でも出て来ることを期待できた」。占卜の出處地における全圖の解明が、こゝでの課題にならねばならぬ。」と語つてゐる。

入注：これまで、國内ででは弥生が奈良時代にまでがる十七カ所の遺構から計六十五の土骨が見つかつてゐること、四十八点かが弥生時代のもので、全体の七〇%が力の骨だといふ。近畿以西では後府の日下遺跡(奈良縣代)と鳥取県の古浦遺跡(赤松郡代)が最古の一級文化層(八人の時代)は大きく入つてゐる。

壱岐島出土ト骨一覧表

項目 番号	遺跡名	出土区層	使用動物	使用部位	残存焼灼痕	保存状態	整治
1	唐 神	6 T - 黒 色	シ カ	肩甲骨(r.)	12		ナシ
2	〃	7 T - 1	〃	〃 (l.)		肩甲下窩欠	〃
3	〃	7 T - 5	イ ノ シ シ	〃 (r.)	?	尾側1/2 欠	〃
4	〃	7 T - 6	〃	〃 (l.)	6	〃	〃
5	〃	東亜考古学会1952	シ カ	〃 (l.)	6	前 縁 破 片	〃
6	〃	松 永 氏	〃	〃 (r.)	3	〃	〃
7	原の辻	東亜考古学会1951	〃	〃 (l.)	1	尾側2/3 欠	〃
8	〃	〃	〃	〃 (l.)	1	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃 (r.)	6	尾側1/2 欠	〃
10	〃	〃	〃	〃 (l.)	3	前 縁 欠	アリ
11	〃	〃	〃	〃 (r.)	2	尾側1/2 欠	〃
12	〃	〃	〃	〃 (r.)	2	後縁のみ残	〃
13	〃	〃	〃	〃 (l.)	ナ シ	尾側1/2 欠	〃
14	〃	〃	イ ノ シ シ	〃 (l.)	ナ シ	〃	〃
15	〃	〃	〃	〃 (l.)	1		ナシ
16	唐 神	W -15 上 層	〃	〃 (l.)	3	尾側1/4 欠	〃
17	原の辻	9 C-7号住居跡	〃	〃 (r.)	10	ほ ぼ 完 形	アリ
18	〃	〃	〃	〃 (r.)	6	尾側一部欠	ナシ
19	〃	〃	〃 ?	〃 (r.)	3 ?	前後縁棘残	アリ
20	〃	〃	〃	〃 (r.)	不 明	不 明	
21	〃	〃	シ カ	〃 (l.) ?	不 明	尾側4/5 欠	
22	〃	〃	イノシシ?	〃 (r.)	不 明	尾側3/4 残	アリ

1～4 九大発掘分 (1977年) 5～15 東亜考古学会 (1951・1952年) 他発掘分
 16 勝本町教育委員会 (1985年) 17～22 芦辺町教育委員会 (1995年)

木村幾多郎「長崎県壱岐島出土のト骨」『考古学雑誌』第64巻 第4号より転載、一部加筆

獣骨を焼き、骨の表面にできる亀裂によって吉凶を占うト占骨は中国の東北地方から朝鮮半島を経てもたらされたものであり、弥生時代の日本ではシカやイノシシなどの骨を焼いて生じたヒビ割れ・色調の変化を見て吉凶を占う風習があったことが『魏志倭人伝』や『後漢書東夷伝』に記されている。

倭人伝には「其の俗挙事往来に、云為する所有れば、輒ち骨を灼きてトし、もって吉凶を占ひ、先ずトする所を告ぐ。其の辞は令亀の法の如く、火圻を視て凶を占う」とあり、ト占の内容がト骨と亀トがあったことが窺え、帯方郡は亀ト、倭人は骨トであったと解釈されている。

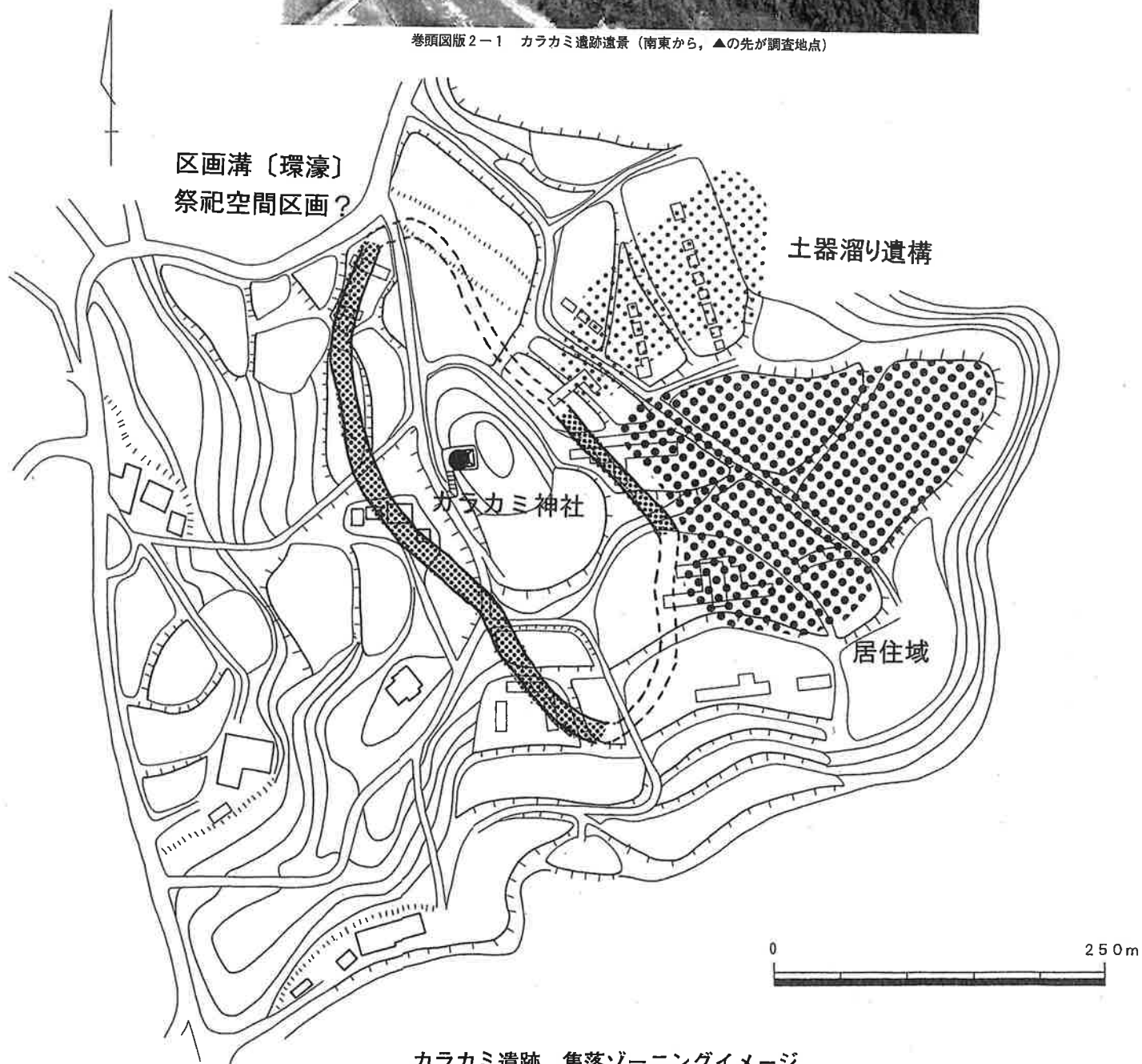
いまのところ、朝鮮半島から日本に受容されたことは間違いのないところであるし、半島南岸に位置する全羅南道海南郡の郡谷里貝塚や泗川市勒島遺跡の近年の調査からは、多量のト骨が出土している。日本では最も近い位置にある対馬島からは発見されていないが、壱岐島では出土している。出土遺跡の多くは近畿・東海・関東地方に及び、特に神奈川県三浦半島の海蝕洞窟遺跡に集中している。

しかし、鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡からは227点のト骨が出土し、これまでの全国の遺跡の総出土数を一遺跡で上回っている。

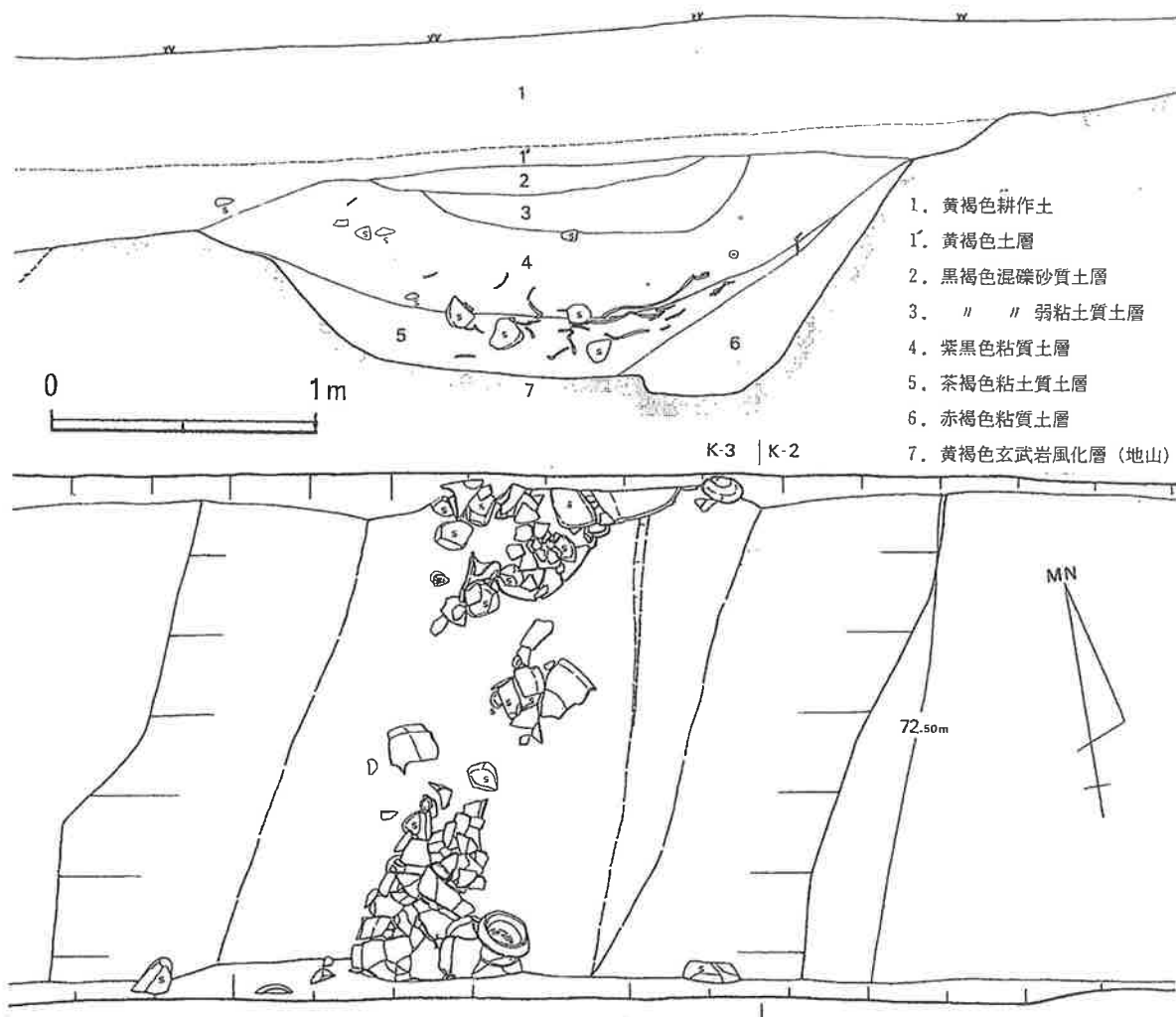
長崎県教育委員会, 2005 『原の辻遺跡 総集編 I』



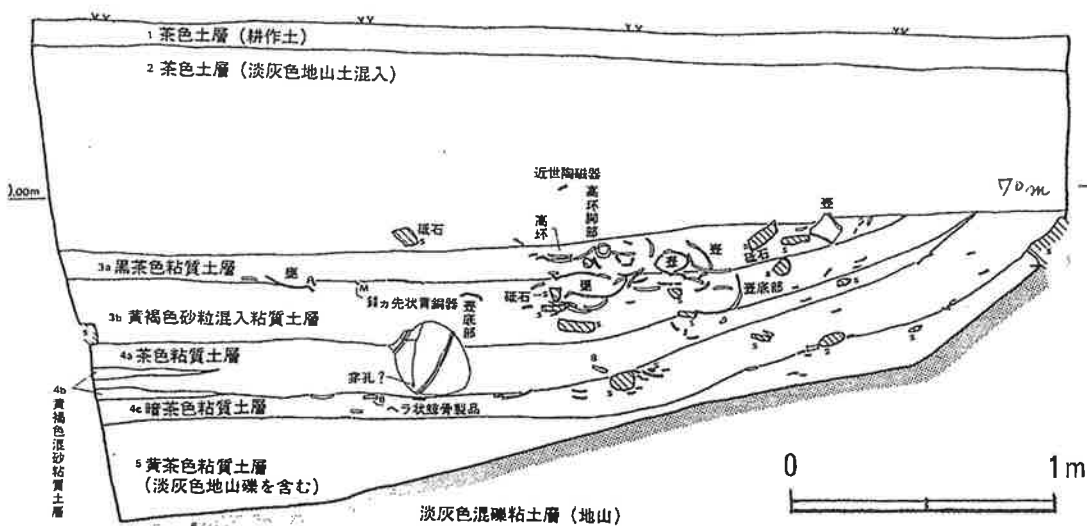
巻頭図版2-1 カラカミ遺跡遺景（南東から、▲の先が調査地点）



カラカミ遺跡 集落ゾーニングイメージ

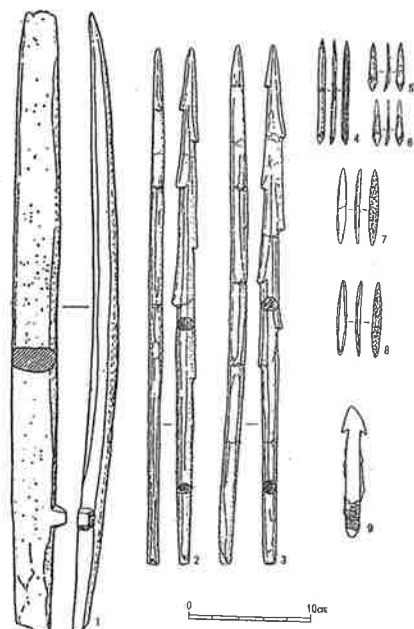


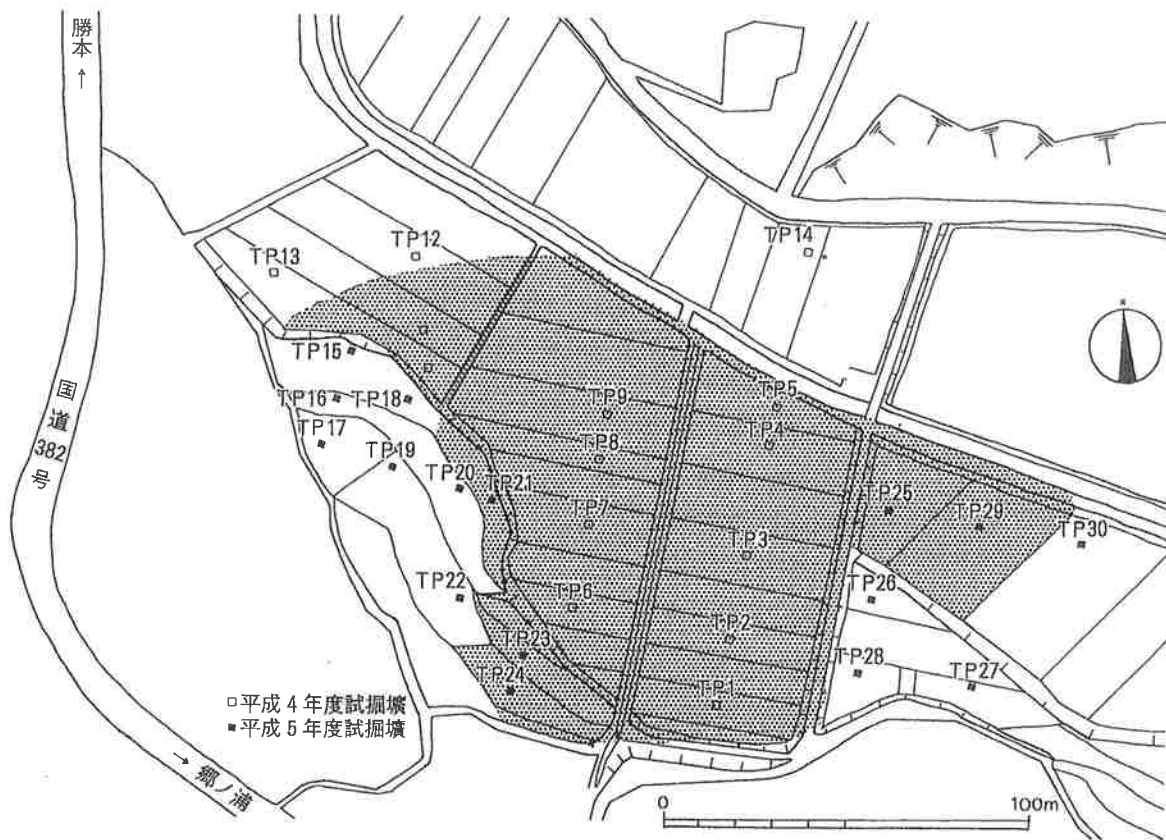
昭和59年度 K 1~3区 大溝



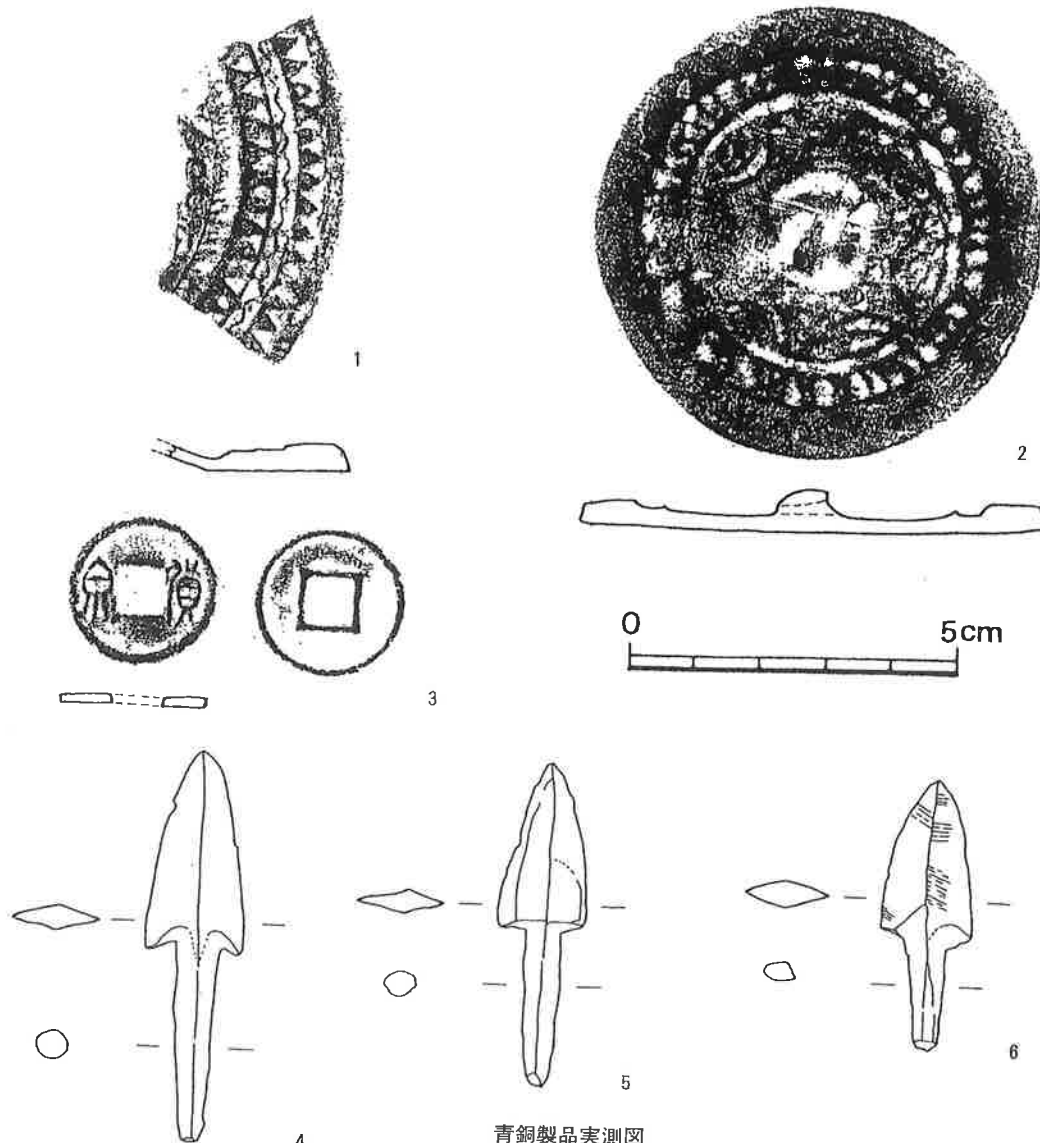
昭和 59 年度 W 4 区 土層断面図

大溝, 土層図



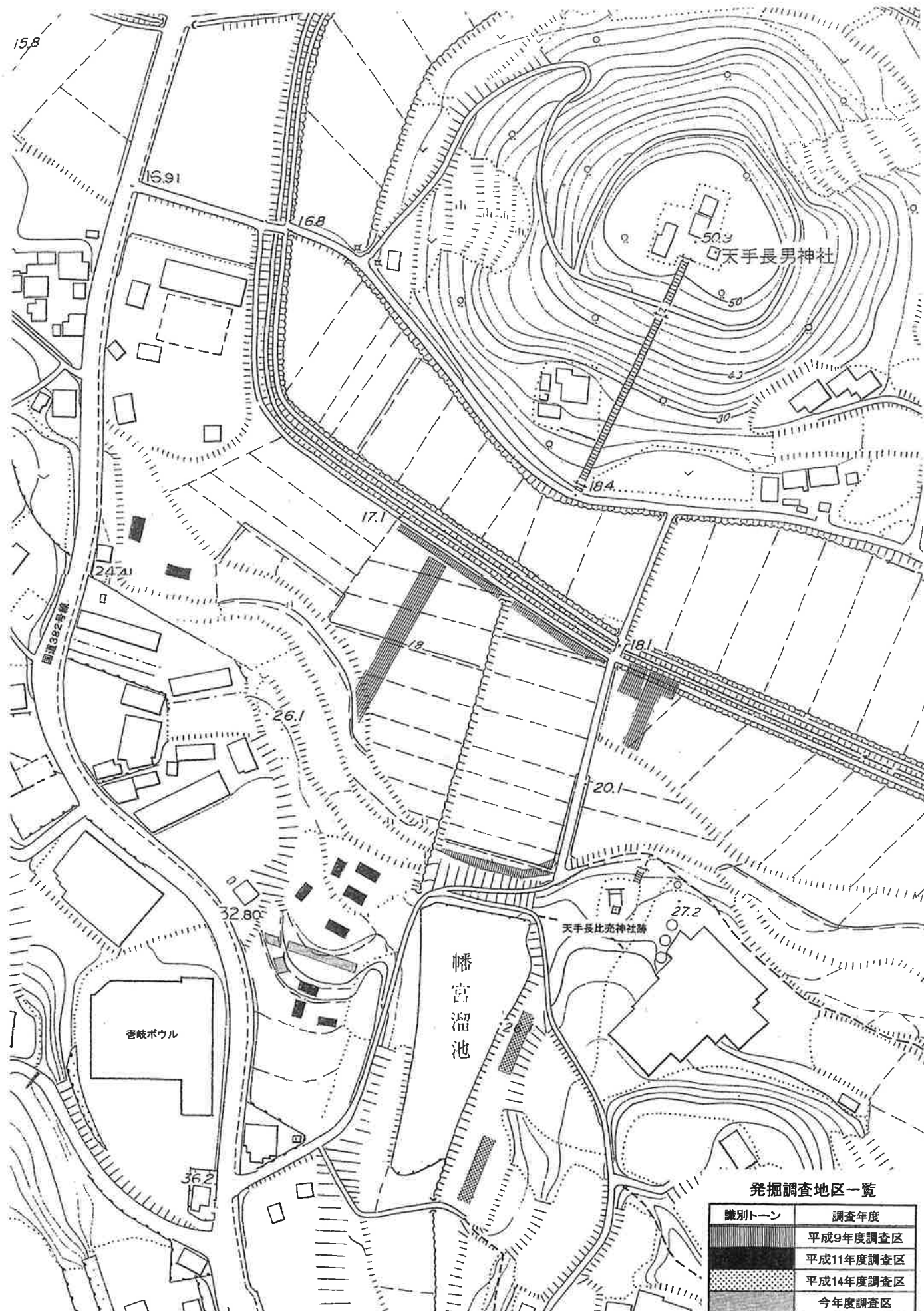


試掘調査坑配置図



青銅製品実測図

長崎県教育委員会・郷ノ浦町教育委員会、一九九八年度調査報告書「第八集」



車出遺跡調査箇所一覧

長崎県長崎市教育委員会, 2006 『観城跡・車出遺跡』 『長崎市文化財調査報告書』 第8集

あまがはら
天ヶ原遺跡

所在地 沓岐郡勝本町東触字菖蒲坂字赤岩

時代 弥生時代～古墳時代

面積 天ヶ原遺跡 約八〇〇平方メートル セジヨウ神遺跡

約二五〇平方メートル、天ヶ原石棺群A地点約六〇〇

平方メートル、天ヶ原石棺群B地点 約一万平方メートル

指定 未指定

交通 バス勝本行き「天ヶ原」下車

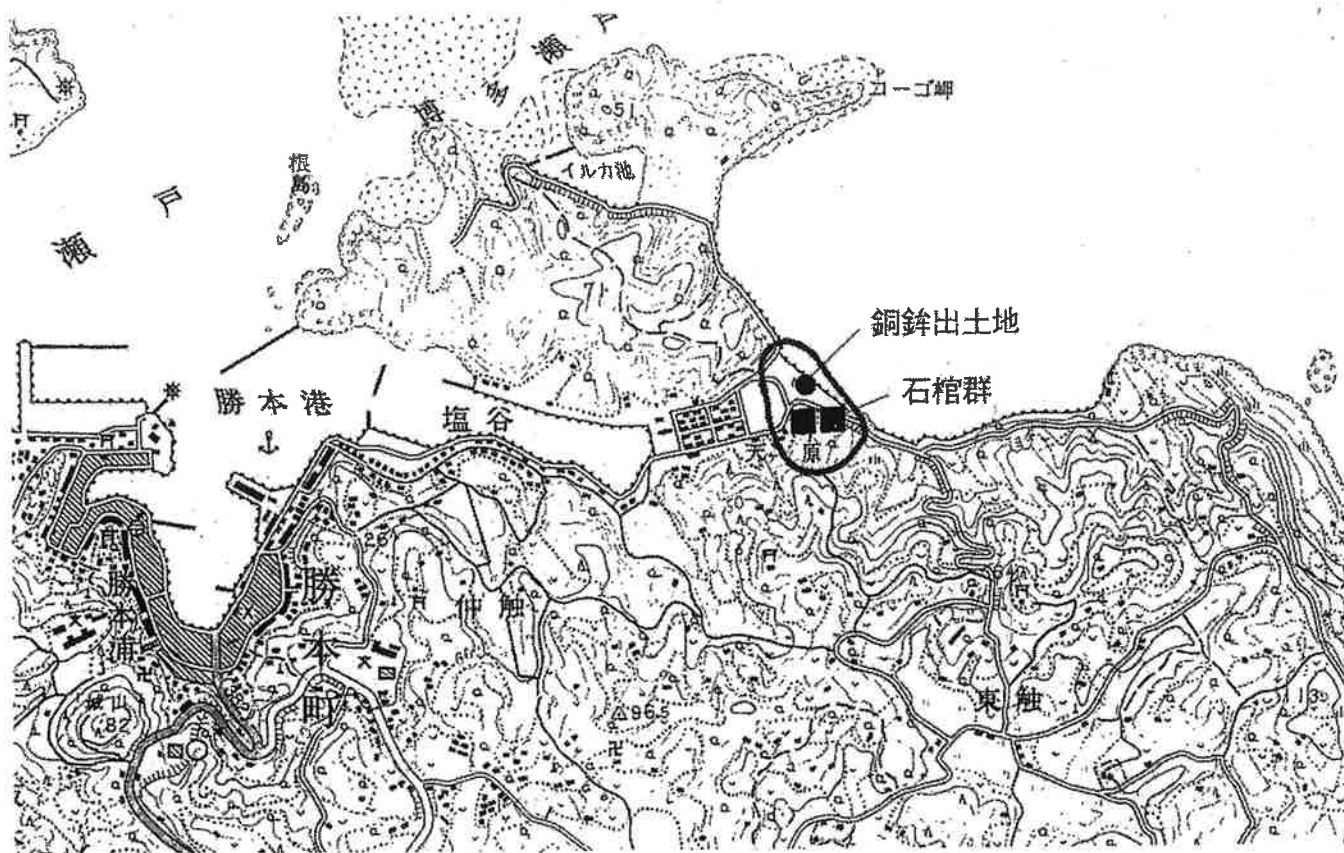
資料所在地 セジヨウ神出土の中広銅矛 沓岐離島開発

センター（芦辺町）一本、沓岐郷土館一本、勝

本町教育委員会一本

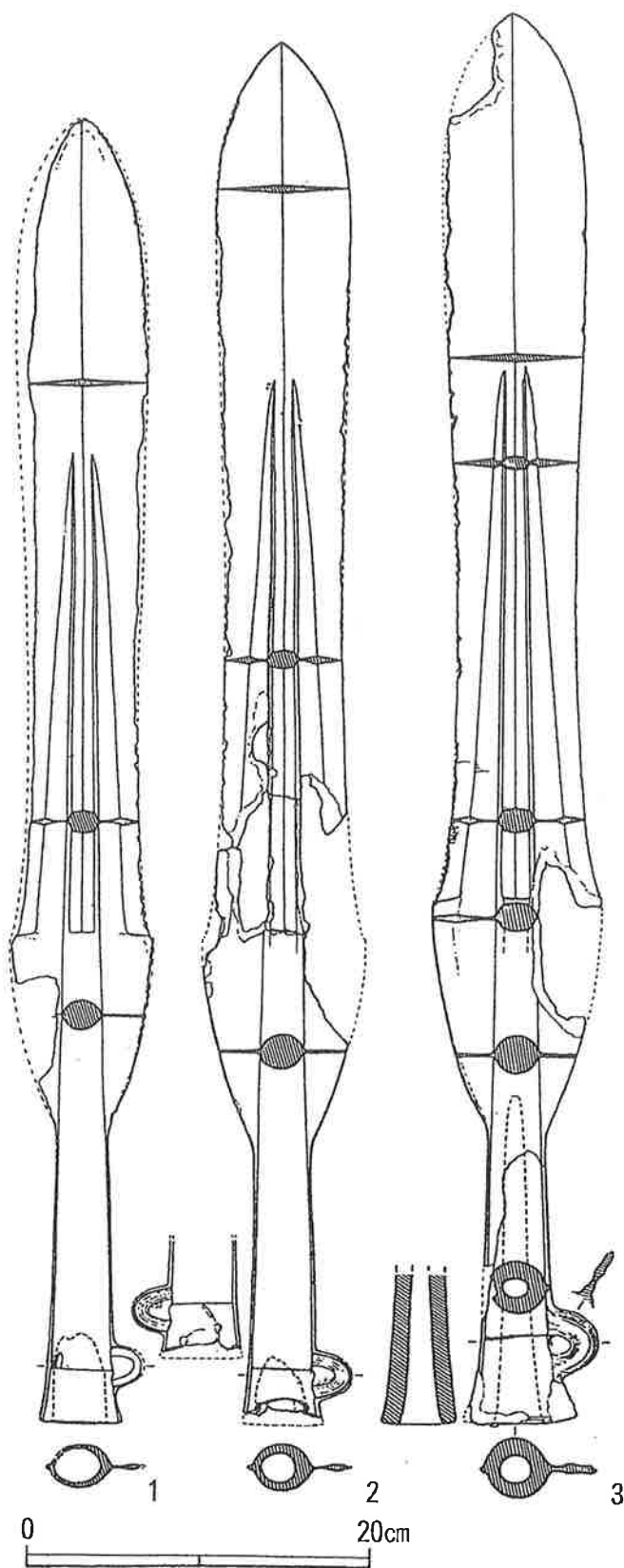
位置と地形

天ヶ原遺跡は沓岐の最北端に位置し、串山ミルメ浦遺跡と隣接する天ヶ原から小串へと伸びる砂州上にあり、東は外海に接する。



長崎県教育委員会, 1986 『原址・古代の長崎県』資料編 I

勝本町教育委員会所蔵の 図3も中広銅矛であるが、袋部両側の突線は一般の中広銅矛に比べて幅が広く断面は台形を呈している。また耳の断面の形をみると菱環の最厚部に相当する部分が単なる突線化しつゝあり、袋部端の形もラッパ状に広がり、広形銅矛に似つつある。関部に大きな欠損があるが、両側刃部は比較的良く残っている。全面丁寧に研磨されており、光沢のある青みがかった淡緑色を呈しているが、欠損部の周囲には白い銹が吹いている。全長八五・一センチ、鋒部から樋の先端までは、二一・五センチ、袋部長は一七・五センチである。鋒部と脊部にはシャープな鎬が研磨により付され、刃部は面取りされている。袋部内の真土は袋部端から一九・七センチのところまで抜かれている。本例の特徴は、普通の中広銅矛では袋部端に節帯を有するが、この矛では彫りの浅い陰刻横線にかえてある点である。



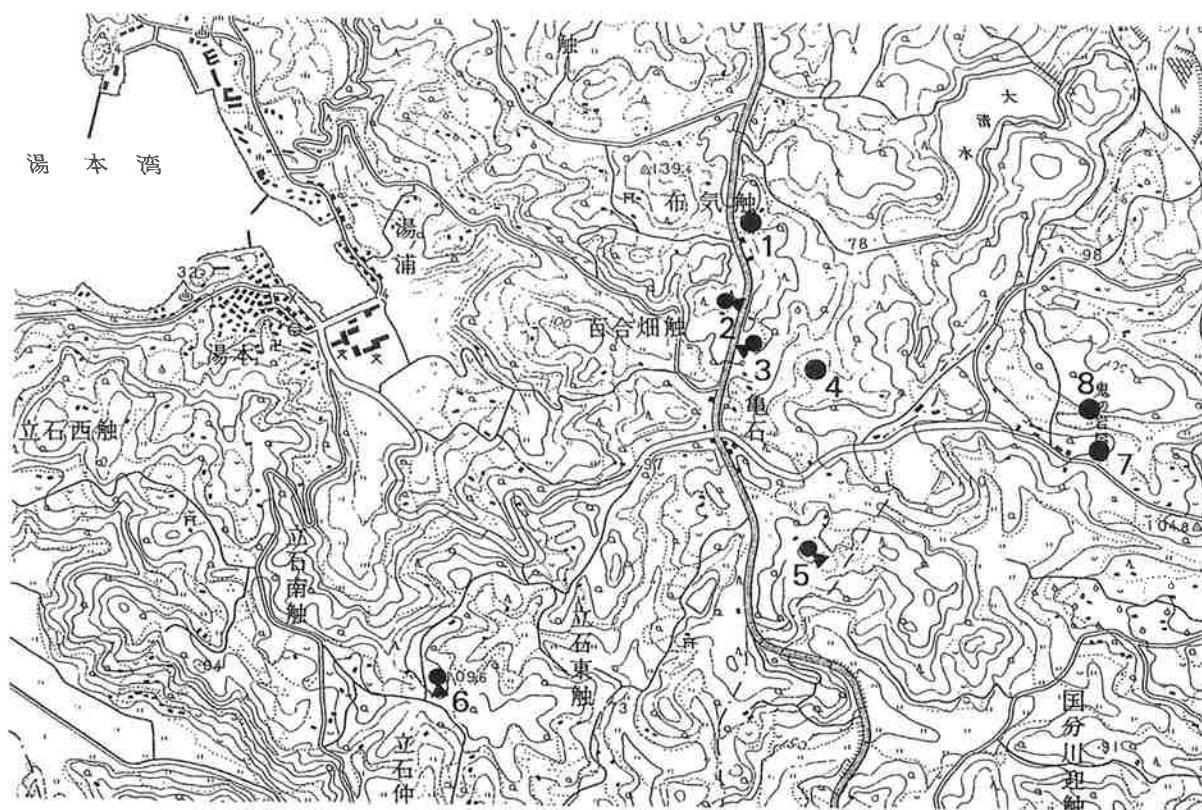
出土銅矛

壱 岐

湯本地区の古墳は、壱岐島の中央よりやや北西に偏って分布する。

1は掛木古墳で、横穴式石室をもった円墳である。国道に面していることもあり、見学の人が多い。2は百合畑古墳群第1号墳で、小形の前方後円墳である。墳丘の北側が削られ、また前方部分の先端も、国道の工事に伴って削られたものと思われる。3は百合畑古墳群第20号墳で、これも小形の前方後円墳である。墳丘の一部が削られ、石室材と思われる石がわずかに見える。4は笹塚古墳で、南を除く三方を低い水田に囲まれているが、水田の回りの部分が高いため、目につきにくい。5は双六古墳で、芦辺町との境に近い場所にあり、後円部の頂上からはかなりの視界が得られる。6の対馬塚古墳は、以上の古墳の中心に近い亀石から南西に2kmほどあり、立地の条件がやや異なっている。7と8とは巨石を使った横穴式石室をもつ古墳で、7は通称「鬼の岩屋」と呼ばれている矢櫃古墳で、墳丘の直径45m、高さ13mの円墳である。この古墳から出土した須恵器は、6世紀後半から7世紀前半に位置づけされている。8は兵瀬古墳で、14mほどの石室がある。8の兵瀬古墳の北西側に、^{ひやくたがしら}百田頭古墳群として8基の古墳が知られ、北側には釜蓋古墳群7基がある。7のすぐ南に、京塚山古墳群として7基の古墳がある。掛木古墳の北東側には布気古墳群があり、亀石古墳群や双塚古墳群なども散在している。

(藤田)



壱岐島中央部の主要な古墳分布図

長崎県教育委員会, 1992『県内古墳詳細分布調査報告書』
『長崎県文化財調査報告書』第106集

・大原天神の森古墳群

大原天神の森古墳群は^{たいばる}壱岐郡郷ノ浦町大原触にある。大原触は郷ノ浦町の北東部にあたり、北は壱岐島中央を東西に流れる幡鉾川をはさんで石田町湯岳^{ゆたけい てふれ}射手触に接し、南は郷ノ浦町平人触の丘陵に、東西約500m、南北約200mの小さな沖積地を隔てて接している。大原天神の森古墳群は大原触を東西に走る町道大迎線の南側にあり、大原触・平人触の丘陵を隔てる沖積地を見下ろす標高30mの位置にあるが、大きくは幡鉾川が潤す沖積平野「^{みかえ たばる}深江田原」の西奥にあるといえる。

大原天神の森古墳群は深江田原西奥の沖積地を生産の場とし、壱岐島横断路の要衝を占めていた豪族の墳墓であったと考えられる。

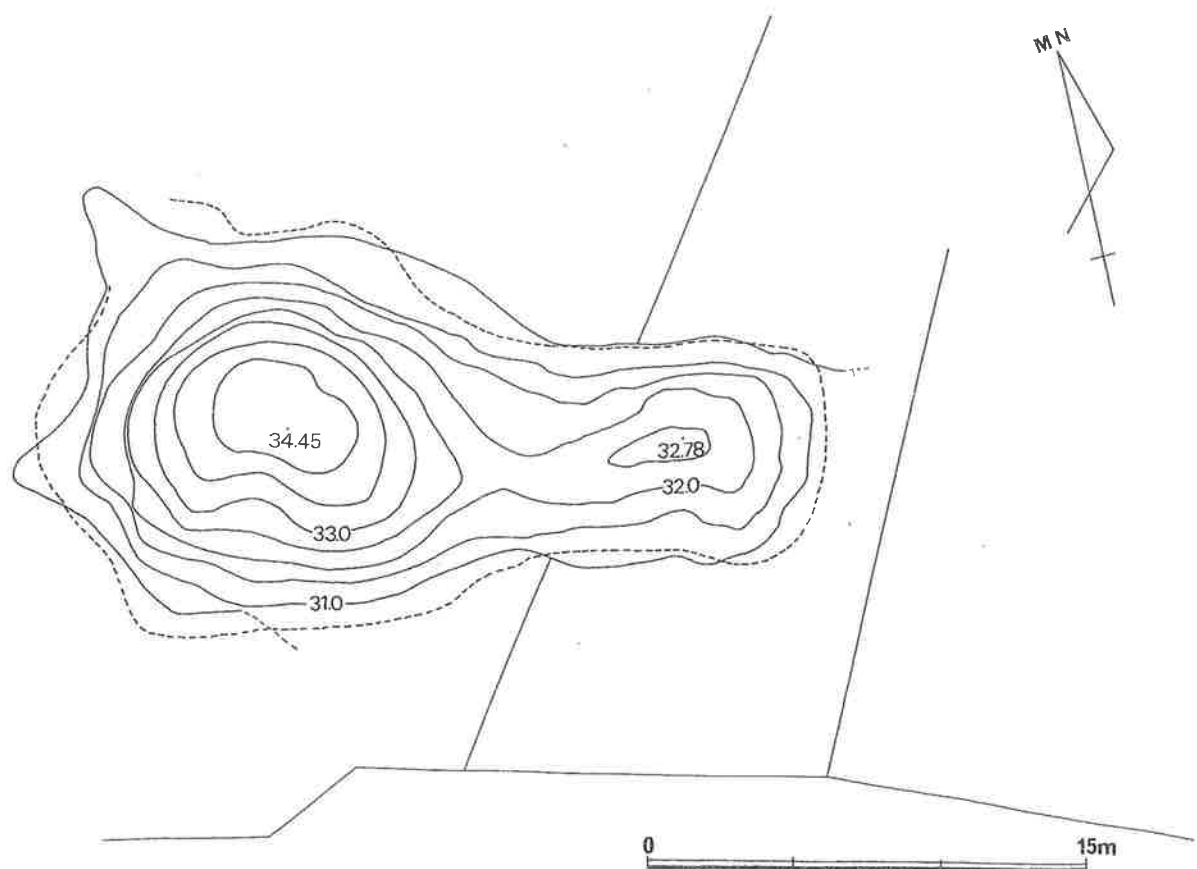
大原天神の森古墳群は町道大迎線の南側にある2基の小形の前方形後円墳で構成されている。

・1号墳

大原天神（正しくは^{おおくにたま}大国玉神社）社殿の西30m、町道の南側25mにあり周辺は5筆からなる私有地になっている。古墳自体は雑木に覆われ、周辺はヒノキが植林されている。

小形の前方形後円墳で、主軸は磁北から76°西に振れ、前方部はほぼ東に向いている。保存状態はよい。全長27mである。後円部は直径14m、裾部の標高30.5m、墳頂部は高さ34.45m（裾部からの高さ約4m）でやや平坦になっている。くびれ部は幅7mで、標高31m強（裾部からの高さ1.5m強）である。前方部は長さ13m、幅7.5mで標高32.58m（裾からの高さ2m強）である。後円部の直径と前方部の長さの比率は7：6になっている。葺石・周濠などは認められない。

墳丘測量のみの調査で、石室に関しては不明であり、遺物も採集していない。



大原天神の森 1号墳 墳丘実測図